

【論文】

中井正一「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介について

後藤嘉宏*

*筑波大学図書館情報メディア系

*ygoto@slis.tsukuba.ac.jp

和文要約

中井正一の「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介には後藤宏行(1965), ついで針生一郎・松岡正剛(1982)が言及し, 両者は嘘言によるコミュニケーションの発展を肯定的に把握した. 他方, 荒瀬豊(1979)は中井における嘘言の克服を強調した. しかし「委員会の論理」を仔細に読むとテキストは双方を支持し, 嘘言が遍在する点を本稿は論じる.

「委員会の論理」は, 連載時の『世界文化』編集後記で元原稿を紙幅の関係で圧縮するように依頼した旨記され, 中井の既存の諸論考の議論を補わないと理解しがたい.

中井の重要概念, 基礎射影及びコブラという言葉は「委員会の論理」でそれぞれ一つの節で僅しか現れないが, 先行あるいは後続する彼の諸論考と重ね合わせると, それらは嘘言の文脈で理解できる. また「委員会の論理」の本題とされる十六節のループ状のモデルにも嘘言は媒介する.

以上のように「委員会の論理」において嘘言が遍在することを本稿は論じ, 難解な「委員会の論理」の理解をやや明快にする一助となることを目指す.

About the communication mediated by lie
in “the Logic of the Committee”(1936) of Masakazu NAKAI
Yoshihiro GOTO*

* Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

英文要約

About the description of lies in “the Logic of the Committee”(1936) of Masakazu NAKAI, Hiroyuki GOTO (1965) and Ichiro HARIU & Seigo MATSUOKA (1982) regarded the lies as useful for the development of social communication. On the other hand, Yutaka ARASE (1979) emphasized the theme of overcoming the lies in NAKAI's all works and his life. However, when we read “the Logic of the Committee” carefully, the text of it supports the useful side of lies and we find the reference of the merits of lies latent but ubiquitous in the text.

In the postscript of the no.14 of World Cultures (Sekai Bunka) in which “the Logic of the Committee” was compiled, the editor had expressed having urged NAKAI to compress his existing manuscripts due to the space.

Although ‘a basic and veritable projection’ and ‘absence of copula’, which both are important concepts of NAKAI's other works, appear only once in “the Logic of the Committee”, we could understand these concepts in the context of lies, if we overlap them with his preceding or succeeding works. Lies also involve the looped models of the 16th section, which is ‘the main section’ (Shunpei UYAMA) of “the Logic of the Committee”.

Owing to these interpretations, this article aims to help us to understand the complicated text of “the Logic of the Committee” more easily.

1. はじめに—中井正一「委員会の論理」(1936)を嘘言という観点から読むことと、その意義

1. 1本稿で扱う「嘘言」の範囲と「委員会の論理」

本稿は、国立国会図書館（以下NDLと略記）初代副館長で美学者の中井正一（1900-52）の戦前を代表する論文で“日本におけるコミュニケーション論の古典”[1](p.115)である「委員会の論理」(1936)を、嘘言の媒介の観点から解説する。

ちなみに論文「委員会の論理」は中井正一が事実上主宰していたとされる同人誌『美・批評』（1930～1935年、発行・美・批評社）を引き継ぐ後継誌『世界文化』（1935～1937年、発行・世界文化社）の1936年1月号～3月号（通巻十三～十五号）に分載され、中井の没後、『世界文化』同人の久野収の編集した中井の論文集『美と集団の論理』（中央公論社、1962年）に所収され、その後『中井正一全集第1巻』（美術出版社、1981年）及び『中井正一評論集』（岩波文庫、1995年）『中井正一エッセンス』（こぶし書房、2003年）に再録されている。この論文の目的等については、本稿1.4等で後述する。

なお「結果的に嘘をついたことになる」という発言も一般にあり、意図せざる嘘もある。よって嘘には意図的なものと意図せざるもの双方あり、後者は誤謬にも相当する。ただ意図的なものの方が嘘の要素は強い。これら嘘や誤謬のうち発言・公表されるものは嘘言となる。本稿2.1で後述されるが、「委員会の論理」では思うこと（確信）よりもそれを発言すること（主張）が重視される。そのことからすると基本的に嘘や誤謬は嘘言である。よって本稿では誤謬も嘘言に含める。

そこで次に本稿の意義を、中井のテキストに即した内在的意義と、テキストや彼の人生からやや離れた外在的意義、二点に分けて論じておく。

1.2本稿の研究史的な位置づけと「委員会の論理」のテキスト内在的な意義、さらには中井のテキスト全体に通底する意義

まず「委員会の論理」を嘘言の媒介の観点から論じる、中井のテキストに添った意義を述べる。

中井は恩師深田康算がロマン派の独創を批判し、リアリズムの芸術を重視した姿勢を引き継ぐ[2](p.43)。その限りで嘘言をロマン派に結びつけ、否定する視座をもつ。一方、後藤宏行[3]や針生一郎・松岡正剛[4]は「委員会の論理」における嘘言の肯定的媒介を強調する。

要するに嘘言を中井は基本的にはネガティブに捉えるが、ポジティブに捉える見方を彼ら([3][4])は示す。やや本稿の内容を先取りするが、前者の嘘言は、そのまま克服の対象となる嘘言あるいはコミュニケーションの疎隔(疎外)状況であり、後者はむしろコミュニケーションの疎隔をのりこえるための嘘言や、コミュニケーションの新たな展開の原動力となる嘘言である。両者の嘘言をあわせて本稿は検討し、また嘘言の媒介の問題は一見すると「委員会の論理」全十六節中、七節[5]のみに現れるが、じつは「委員会の論理」の最終節十六節まで貫くのではないかという観点で本稿は論を展開する。

またこの嘘言の媒介の問題を探ることは、中井のメディアム、ミッテル二つの媒介概念の解明の一助にもなる。

この二つの概念について稲葉三千男は中井がメディアムよりもミッテルを、と述べた点に着目し[6]、北田暁大は中井の現代的意義を強調する際に、稲葉を前向きに評価する[7]。この時期、中井はミッテル概念を極めて肯定的な意味で使った。

なおメディアム、ミッテルが何かについては後藤嘉宏[8](p.63)や大窪一志[9]に両概念の要素を整理した表があるが、メディアムは自己肯定的媒介、ミッテルは自己否定的媒介である。媒介とはやりとり、コミュニケーションを意味する。情報の送り手にとって自己否定的媒介は、情報の受け手との対等性のあるやりとりで、送り手が仮に知識人であるとする、知識人にとって、大衆が自分らと対等であるとの主張に通じる。ちなみに“この論考「委員会の論理」でもっとも重要な概念は「媒介」である”[9]とした大窪は、さらに、中井が

同論考で“「・・・否定的な媒介（ミッテル）」こそを重視している”[9]（〔括弧は大窪，・・・は筆者〕）と指摘する。

1.3 嘘言の媒介で「委員会の論理」を論じる、現代のメディア状況に照らした意義

次に嘘言の媒介の観点で「委員会の論理」を論じる、テキスト外在的あるいは現代のメディア状況に照らした意義を少し述べておく。

本稿の議論をやや先に見通すと、自己の見解も発言と同時に命題の評価部分が省かれ「他者」の位置におかれ、最初の自己の見解の位置からすると嘘言とされる。しかしこの嘘言を通じて判断の機会を他者に委ねるからこそ、自己の見解への拘りのない双方向性のコミュニケーションを目指す捨て身の媒介、ミッテルが可能となる。先に本稿4段落前（本稿1.2の下から数えると末尾から5段落目）最後の文章に述べたように、仮に「委員会の論理」が嘘言の媒介に貫かれるならば、同論文は自己否定的なミッテルの媒介の窮極の姿を示すことになる。

一方、インターネット・コミュニティでフレーミング等ディス・コミュニケーションの頻発する現代、意味を介して相手と通じる“共同性”よりも、意味を介さずに相手と通じる“協働性”が望まれ[7](p.68)，そこで“われわれはメディアを意味伝達装置としてまなざすことを断念する”[7](p.75)と、北田は中井についての論文の中で、記す。この発言から18年経て、イーライ・パリサーのいうフィルターバブル[10]のように、同じ嗜好の者同士のみ集う傾向はますます強まっている。同調できる仲間以外には意味を介さず通じていく。否、そもそも通じようとさえせず，“共同”はおろか“協働”さえ拒む状況が、SNS等のネット社会に生じている。

そのようなメディア状況の現在、自己の見解を嘘言と考え異質な他者に拘りなく飛び込む、「委員会の論理」の嘘言の媒介の議論の再確認は意義深い。異なる次元の人々への壁こえとして捨て身

の媒介、ミッテルを中井は共通感覚論として1930年代から意識化する[11][12][13]が、次元の違う世界に棲む人間を避けたがるのは今も昔も変わらない。よってこの壁こえの姿勢は現代、益々有益である。

この点の議論に及ぶ点で、本稿には中井のテキスト外在的な意義、いいかえると現代の社会状況に照らした意義がある。

1.4 本稿の副次的意義—「委員会の論理」の書かれた目的への将来の考察の一助となりうること

次に本稿の直接の意義や目的ではないが、「委員会の論理」を中井がどういう目的で書いたかを考究することも本稿の副次的な目標である。

一般にファシズムに抵抗する人民戦線のための組織の論理、あるいはそのための“集団的主体の実践”[14](p.461)の論理を述べた著述とされる。特に組織の論理は党派イデオロギーとして硬直化する危険性が常にある。そのような竹内成明のいうところの“論理の自己疎外”[15](p.215)を避ける方策を記した論文が、「委員会の論理」であるとされる。

しかし「委員会の論理」の目的をより明快に理解する前提として、そもそも中井のいう「委員会」とは何かをはっきりさせる必要がある。それについては必ずしもこれまで明確にされてきていない。したがって本稿では「委員会」とは何かも論じる。しかし「委員会」とは何かについては本稿4.2、4.4や5.3で後述するように諸説あり、その意味確定自体、別途一論文以上の紙幅を要する。

というのも中井自身、「委員会の論理」以外の様々な論文や小文で「委員会」の語を若干それぞれ異なった意味で用いていて、しかもそれらの「委員会」は論文「委員会の論理」の「委員会」の先駆形態であったり、発展形態であったりする。よって「委員会」の意味確定も本稿の直接の目的とはせずに、あくまでも嘘言の媒介で「委員会の論理」を読む場合に、「委員会」の意味内容がどうなるのかという暫定的な議論にとどめる。ただし

今後筆者あるいは別の論者が「委員会」とは何か、さらに「委員会の論理」とは何を目的とした論文かという、本稿より射程の大きな本質的課題に取り組む際の手がかりも、一定程度示したい。

1.5 本稿の先行研究と本稿の方法・観点

次に先行研究をふり返りつつ、本稿の観点や方法について記す。

『美・批評』『世界文化』を通じて中井を支えた辻部政太郎は“かなり難解な部分を多く含む”[16](p.453)「委員会の論理」が中井のそれ以前の諸論考の集大成として執筆されたと指摘し、それらとの比較の必要性を訴える。本稿もそれを読解の方法としたい。なぜならこの論文連載時の『世界文化』編集後記で“紙面制約の為に論述に十分な展開の犠牲をお願いした”[17](p.64)旨、明記されるからである。

他方、門部昌志は「委員会の論理」に先行する諸研究を「委員会の論理」に引きつけて理解する方法には、“後の視点を特権化して先行する論考を読むことの弊害”[18](p.70)があると難じる。要するに中井の中にあった多様な可能性の芽を潰す読み方で、後追的に歴史を再構成するものにすぎないという。これは暗に辻部や私自身のこれまでの研究への批判でもあり、至言である。しかし辻部[16]の指摘や『世界文化』編集後記[17]での記述を踏まえ、能力及び紙幅の制約から門部[18]の当を得た批判に答えることは将来の課題とする。

次に本稿の直接の先行研究であるが、先述の後藤(宏)[3]がこの問題の先駆けで、ついでやはり先述の針生・松岡[4]も嘘言の肯定的な媒介を強調する。他方、荒瀬豊[19](p.149)は日本最初の帝王切開による中井の誕生に感謝した父親が、父子共に嘘をつかないと誓った点に注目し、嘘言の否定・克服の文脈で中井の生き様や「委員会の論理」以外も含めたテキスト全般を読む。しかし「委員会の論理」を嘘言の側面から仔細に読むと、テキストは嘘言の否定と肯定、双方を支持するのではな

いかという観点で、本稿は議論を進める。

この矛盾する箇所との併存は、「委員会の論理」の概念が中井の着目した映画のカット同様、場面ごとに変化するという本間伸一郎[20](p.16)の指摘からも納得いく。しかし本稿では節と節との矛盾に着目しつつ統合も図る。さらに上野俊哉[21]も後藤(宏)[3]、針生・松岡[4]同様、嘘言の積極的側面を強調するが、彼らと違い、上野はその積極面を空間論へと展開する。その点は本稿5.で論及する。

2. 「委員会の論理」における嘘言の遍在

後藤(宏)は「委員会の論理」が“嘘言の媒介”の議論を展開する端緒を掴みつつ、それをつきつめず“組織の論理”にすり替えたと批判する[3](p.280)。しかし前章(1.)で示したが、本章(2.)ではすり替えは表面的で、“嘘言の媒介”が形をかえつつ、じつは「委員会の論理」七節以降を貫くか否かという観点から、論を展開する。

2.1 「委員会の論理」七節と八節の間隙

「委員会の論理」七節と八節では嘘言の位置づけが逆転する。中井の先行論文「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」(1930)等で示されたライナッハの確信と主張の議論が、「委員会の論理」七節と八節で展開されるが、この二節に間隙がある。

七節では“何れの言か嘘言ならざると云ひたい程、日常及公的生活は嘘言に充ちてゐる”[22](p.18)と記され、自分の心の中の判断である「確信」を本心とすると、我々の発言である「主張」はほとんど嘘言になるとする。嘘言遍在論である。ところが八節で嘘言の話は消え、「主張」を外に開かれたものとして強く肯定する立場を貫く。この矛盾の状況の詳細とその意味をみてみよう。

七節で“何れの言か嘘言ならざると云ひたい程、日常及公的生活は嘘言に充ちてゐる”[22](p.18)と述べ、毒杯を飲まれたソクラテス、火炙りの刑に処せられたブルーノ、自説の否定を強いられて

も真実を小声で呟いたガリレイを挙げる。彼らは確信も主張も基本的に同じ発言を貫き、迫害される。命も顧みず危険な歩みへと踏み出す彼らは例外である。彼らの例を示すことで逆に、通常は確信が真実で主張は嘘言になるという中井の発言の説得力は増す。

主張が嘘言になるのは、その主張が認められるのに量を要するからである。質を深めて得られるのが確信で、他方、量すなわち賛同者を増やすのは主張である[22](p.18)。

試験の答えは、採点者の同意という量への転化を必要とする。その点で確信ではなく主張である。とりわけ就職試験での応答は意識的・無意識的な嘘言を招く主張である[22](p.18)。出版物は編集者や読者に受け入れられる単純化を経てはじめて印刷可能で、やはり量への転化が必要となる点で主張である[22](p.18)[23]。選挙の公約、スローガンも票数を得るための主張である。このように「委員会の論理」七節では、確信が主張になるに際して、ほぼすべからず嘘言になるとされ、本稿2、3段落前、それぞれ冒頭に引いた“何れの言か嘘言ならざると云ひたい程”以下の引用文になる。

他方、八節では主張が嘘言であるとの見解は消え失せ、確信が主張に発展するのは望ましいという考えのみが強調される。

ここに八節で中井における重要概念であるコブラという語が、一箇所だけ現れる、その箇所をみておこう。コブラについてはヴィンデルバントの否定判断との関連で示され、それに確信と主張の議論が続くが、以前、何度読んでも筆者はその趣旨を汲みとれなかった。しかし以下のように、『美学入門』[24][25]等のコブラの不在の議論をあわせ読むと、輪郭が掴めるようになる。

ここでコブラの不在と述べたが、コブラの意味をまず確認しておく必要がある。コブラとは繫詞・繫辞を意味する。では繫詞（繫辞）とは何か。

林達夫ほか編『哲学事典』は「繫詞」を、以下のように説明する。“[英] *copla* [独] *Kopula* [仏] *copule* 判断あるいは命題において主辞と賓辞との関係をいいあらわす言語的表現をこう呼ぶ。ま

た連詞ともいう。形式論理学では“である”で表現するのがふつうである”[26](p.338)[27][28]。また前掲北田論文によるとコブラとは、“「である」「でない」のように、命題内容に対する話し手（書き手）の判断を提示することにより聞き手（読み手）の理解を容易にする統語論的装置”[7](p.69)〔（ ）は北田〕)であるとされる。よってここでは上記の北田の示した“である”を典型とした説明を、本稿のコブラの意味として論を進めていく。

そこで再び「委員会の論理」のコブラの記載部分の検討に戻るが、まず「委員会の論理」八節におけるヴィンデルバントの“批評的無関心”にふれておく。これは表象結合はできているが、それに対する否定や肯定の判断を保留した状態である。

“表象結合は完成せられてゐるにもかかわらずその真理判断の評価のみが欠けてゐるところの判断の中止”[22](p.24)〔傍点筆者。以下断りある場合以外は同様〕)した状態である。

この点を押さえ「委員会の論理」を離れてコブラの議論を、中井の戦後の代表作『美学入門』(1951)からみってみる。映画はカットの連続で、カットとカットを繋ぐ言葉であるコブラが不在である。よって受け手が自分で「・・・である」「・・・でない」のコブラを補う必要があり、受け手の主体性が確保されるという[29](p.68) [30](p.86)。

中井自身の言葉で確かめよう。

“映画が、演劇および文学のごとく「である」「でない」の説明の繫辞（コブラ）をもっていないことは、この「である」「でない」の判断を、大衆の意欲、歴史的主体性に手渡すこととなるのである。一中略一繫辞のないカット、それは進行を停めた歴史の瞬間である。前のめった歴史である。多くの前のめった歴史的瞬間を、一筋に貫くものは、原始時代より、歴史の未来にまでも、一もって貫いている人間の歴史的嘆息である”[29](p.68)〔（ ）は中井。中略は筆者〕[30](p.86)。

つまり映画に“「である」「でない」の説明の繫辞（コブラ）”がないからこそ、“「である」「でない」の判断”の権利が、“大衆の意欲、歴史的主体性に手渡”され、受け手である大衆の解釈上の主

体性が確保される。

なお先にもみたように繫辞・繫詞とは、北田によると“「である」「でない」のように、命題内容に対する話し手（書き手）の判断を提示することにより聞き手（読み手）の理解を容易にする統語論的装置”[7](p.69〔（ ）は北田〕)である。“話し手”など送り手の“判断”を示すものがコプラで、本稿 5 段落前の引用文冒頭の“表象結合”という連語の“表象”の語は、このコプラの議論では映画のカットに相当する[19](p.148)[29](p.192)。

そこで「委員会の論理」八節に戻るが、そこで「コプラ」の語が一度のみ現れる。一度しか現れないが意味は大きい。佐藤晋一[2](p.103-104)は「委員会の論理」の原構造を探る一環で、田邊元の著書への中井の書評(1932)において、中井が「繫詞の判断論」、さらに「投票論」「物価論」という「委員会の論理」でとりあげる事項に着目した[31](p.310)点を剔出する。そこで佐藤[2]は、繫詞とはコプラゆえ映画論のコプラの不在と「委員会の論理」との関連の深さが示唆されると指摘する。

以上より先に本稿 1. でみた「編集後記」での紙幅の理由による圧縮要求[17]も傍証としながら、本稿は「委員会の論理」ではコプラの議論が重要との佐藤の見解に則り、コプラの記述を検討する。

難解だがよく読むと『美学入門』同様の構成をとる。論理はすべて暫定的であるとして“論理がそれ自ら推論的合理性を整へるにもせよ、その整合が、常に成立せるその場に於いてすでに一段階性をもつてゐることに注意しなければならない”[22](p.22-23)と述べた後、次のように語る。

“その凡てのコプラ「ある」は、一全体性として、底の抜けた無底の否定可能の蒼空に投擲されてゐるのである。そして再び現象の検討面の上に降立つことによつて、推論そのものが成立するのである”[22](p.23)。

要は自分の確信の段階で自分の命題は「である」「でない」の判断を示す言葉、コプラを伴う。しかし主張の段階で、“話し手（書き手）の判断を提示することにより聞き手（読み手）の理解を容易にする”[7](p.69)ものである、コプラを外す。コ

プラを外すとは、前段落の中井の表現では“底の抜けた無底の否定可能の蒼空に投擲され”ることである。あるいは命題としてはコプラを伴っても相手に判断の権利はすべて委ね、自分のコプラは実質、外す。判断は主張を聴く側に任せ、“再び現象の検討面の上に降立つ”。

このようにコプラを外し他者に判断を委ねる点も、中井自身明言しないが彼の趣旨を汲むと、嘘言で説明できる。というのも判断を他者に委ねるとは、いいかえると確信したことを主張することで、先ほど確認したが、ブルーノ等以外、確信に較べ主張は嘘言を幾許かは含むからである。よって本稿 11～12 段落前でふれた“批評的無関心”に関する、表象結合は完成されているが真理判断の評価が欠けているという趣旨の引用文のくだりと、本稿 3 段落前の、論理は“一段階性をもつ”以下の、本稿 2 段落前のコプラに関する“底の抜けた無底の否定可能の蒼空に投擲されてゐる”という引用文、双方に即して、中井の趣旨を筆者なりに纏めると以下の《 》のようになる。

《主張は、自分の判断を示すコプラを外し他人に判断を委ねる段階で、主張する当人にとって嘘言となるが、主張を聴いた人にとっては聴いて判断をし、その判断を新たに確信する段階で、嘘言でなくなる。しかしその聴く側にいた人が、聴いて感銘・確信した命題を自分のものとして主張する際、それは彼にとって再び嘘言となる》。

要するに「委員会の論理」七節では嘘言を否定していたのに、八節に入ると、嘘言をほぼ必須とする主張というものを肯定する点に、矛盾がある。しかし、八節でコプラの議論があり、それと七節の確信と主張の議論を組み合わせることで、嘘言によりコミュニケーションを外に開くことをめざしていると理解できる。これは単数（個人あるいは、より少数）と複数（集団あるいは、より多数）とで嘘言といわれるための基準やレベルが変わると考えれば、矛盾はない[32]。

2.2 商品の嘘言性

「委員会の論理」の後半部十二節～十六節は本稿 3. で検討するが、商品性と専門性による疎外とその乗り越えがテーマで、その前の七節から商品性の検討は実質始まる。このように「委員会の論理」で大きな問題としてクローズアップされる事柄は、商品性ゆえ、ここでは商品の嘘言性をみる。

まずすでに本稿 2.1 でふれた、出版物等の嘘言性がある。売れない本はほぼ存在しない。自費出版を除き、売れるという編集部の判断を得る嘘言を多かれ少なかれ執筆者が語り、はじめて原稿は陽の目を見る。さらに学生は労働力商品を経営陣に買わせる就職試験で嘘言をいう必要がある。このことは、瀧川事件後、学生たちが就職を意識して自らを規格化する[33](p.18)という「蓄音機の針」(1933)に記された中井の文章とも照応する。

この点もコプラで説明できる。「これは面白い本であるか」「自分は誠実な人であるか」と問いかけ、「である・でない」のコプラを当人は控え、編集者や人事担当者が判断のコプラを埋める。自分の原稿はそれなりの水準で、自分は人並み以上に誠実であると、通常、内心は思う。よってこの問いかけは当人からみると半ば嘘言である。

しかしここでさらに考慮すべき事案がある。どの編集者からも「である」といわれない原稿は本「でない」ではなく本「がない」になる。どの会社の人事からも「である」といわれない学生は、その人の存在「がない」に至る危険に晒される。

中井は十三節でセメントを例にとる。セメントを売りにだすことは**“これはセメントであるか”**[34](p.16 [太字は中井, 以下同様])と質すことで、「はい、これはセメントである」との売り手自身の判断を保留し、その「確信」を市場に問うことで「主張」し、「である・でない」の判断は購買者に委ねる。**“「である」の可能存在は、そのまま「がある」の現実存在に連続するのである”**[34](p.16)。

このように「である」「でない」のコプラの極限に「がある」「がない」がある[35][36][37]。「がない」を意識すると、その逆に相当する「がある」状態を何とか死守するため、中井は明言しないがなおのこと主張は嘘言方向に歪む。20 世紀のブル

ーノになるか嘘つきになるか（あるいは表向きは屈服しその後は小声でのみ真実を語ったガリレイになるか）の瀬戸際におかれる。つまり「がある」という生存がなくなる可能性もある中、最低限の生存を守るため、労働力商品を含めた商品の買い手（労働力商品の場合、資本家）への売り手（労働力商品の場合、労働者）の媚びへつらいは、より強くなる。

この状況を現代におきかえると、求められないものはあっても存続し続け得ない。パーソナライゼーションやフィルターバブル同様の状況である。どれほどよくてもアマゾンのお勧めやグーグルの検索結果一覧で下位におかれると事実上存続できない。もちろんロングテールの少数アイテムの存在もアマゾン等は可能にし、後世に起爆剤のタネは残す可能性はあるが。

以上本章 (2.) で「委員会の論理」（特に七節～十三節）では嘘言の媒介の議論は、表向きライナッハの確信と主張の説明に限られるが、コプラの不在の議論や商品の嘘言性に形を変え、貫かれる点を確認した。ここでは嘘言によって大きな真実を生き残らせるという、嘘言の媒介の一つの形が示されているといえる。

3. 「委員会の論理」後半各章における「審議性」と「代表性」の位置づけの揺れ

本章 (3.) では「委員会の論理」の後半十二節から最終節十六節に存在する矛盾をまず指摘し、次に十六節の要の概念である基礎射影と嘘言の関わりをみる。まず十五節までを論じる。なお本稿 2.2 の商品の嘘言性は七節～十三節に依拠し、そのうち十二節、十三節は、ここと扱う節は重なる。

まず短い十二節で商品性と専門性が簡単に紹介され、十三節以降で商品性と専門性（あるいはそれぞれの対策である審議性と代表性）の議論が展開される。なお商品性と専門性並びに各々の処方である審議性と代表性の意味は本稿 3.1 以降でふれるが、次の段落で予め見取り図的に概略を示す。

商品性とは、第一に本稿 2.2 の商品の嘘言性で

述べた、売る目的のため商品が本来の姿から歪むことであるが、同時に商品の目的の議論を“会社専属の技術委員会”[34](p.19)が独占し、そこから大衆が疎外され、大衆は商品の表象しか分からないことも意味する。本稿前文の「同時に」以下の部分での“会社専属の技術委員会”は専門技術者を企業が囲い込むので、会社は商品性と専門性をあわせもつとされる。一方商品性を産業界、専門性を学界（学会）が担うとも中井はいう。この場合の専門性は、学界が縄張り意識と“「見てくれ根性」、「抜け駆け根性」”[33](p.155)により全体的な見通しと協同性を欠く状態を意味する。この専門性と分けた意味での商品性に対しては、審議性が処方とされる。なお工場で秘密裏に行われる技術委員会により商品の機能がきまるが、その議論を大衆に開くのが審議性である。他方専門性には代表性という処方が示され、具体的にそれが何かは本稿 4. で後述する。

以上見取り図をみたので、次に本稿 3.1 以下で具体像をみるが、その前にこれら商品性と専門性二つの概念の位置づけが節により変わる点に、予め注意を促したい。木下長宏[38](p.4-5)、門部昌志[39](p.31-32)は「委員会の論理」が雑誌『世界文化』の三つの号に連載された点を重んじ、各号の間の断層を意識した読みを求めるが、本間[20](p.16)は中井の概念がそもそも流動的であると指摘し、細かい断層の存在を示す[40][41]。本稿で注目する部分に限れば本間[20]に妥当性がある。なぜなら先にみた断層のある七節と八節[22]も、さらにこれからみる、五つの節の中に断層のある十二節～十六節[34]も、それぞれ『世界文化』の同じ号に載っているからである。特に同じ号掲載の十五節までと最終十六節との間に大きな断層がある。

上山春平は、十六節がこの論文の“本題”[42](p.249)でそれまでは前史にすぎないと指摘するが[43]、この見解も掲載号による差よりも大きな違いを十五節と十六節との間に認める点で、各節で断層があることの傍証となる。

ここでは審議性と代表性の位置づけの節ごとの

ズレをみるが、それらは処方の各々の適用領域である商品性と専門性のズレにも、即、なる。以下の議論の概略を予め示すと、十二節～十五節では全体として商品性と専門性（あるいはその問題への対策である審議性と代表性）が並列で捉えられ、十六節では階梯、ステップで捉えられる。

この並列と階梯の矛盾とその統合的理解の課題は「委員会の論理」の根幹部分である、十六節の解釈に関わるので、本稿 3.1 でテキスト上の表れを煩瑣であるが検証し、本稿 3.2 と本稿 4. での、「委員会の論理」の“本題”[42]十六節の理解という大きな問題に繋げていきたい。

3.1 「委員会の論理」十二節～十五節における審議性と代表性の並列性

十二節～十五節で中井は産業界（の委員会）と学界（の委員会）に共通する問題を当初挙げつつ、後の節で強引に二つの界を分離する。テキスト自体に矛盾があるが、以下それを見る。

「委員会の論理」の短い十二節で現代、概念が商品性と専門性をもつとされる。ただし商品性とは経済活動の領域のことであるのが明らかな反面、専門性の方は曖昧で、経済活動と学術双方、それどころかあらゆる領域に、及ぶとされる[34](p.16)。

次の節、十三節では“まず商品性における特殊性を顧みやう”[34](p.16)という。さらに次の十四節では、第 1 段落で十三節の要約をし、その上で、“知的技術の分野に於ける**専門化**によつて起るところの概念構成を顧みたい”[34](p.18)と記す。それぞれ十三節で商品性、十四節で専門性をみるとされる。よってその順に本稿本節もみる。

十三節では概念の一般性が商品に欠けるとされる。窓があるとする。通風、採光、展望が窓の基本機能で、通常これらの機能の配分で個々の窓の性格はきまる。ところがこれら 3 要素は建物の他の部分に委ねると、窓に柱や壁の機能をもたせ得る[22](p.32)。しかし大衆は表面からみた窓しか知らず、窓の概念の一般性から疎外される。つ

まり窓に柱の機能があっても、外観の情報しか与えられていない大衆にはそれが分からない。このように人間的目的から商品が疎外される状態を無批判性と[34](p.18)、十三節の末尾で記す。

十四節に入る。専門化の原因として分業化をあげ、分業化の領域を産業界（“会社専属の技術委員会”）と学界（“学界及び学界研究委員会”）[34](p.19)とに分ける。前者は“商品性”“無批判性”に関わり、概念の一般性が大衆から離れることに関与する[34](p.19)。十三節とは違い、ここでは後者の学界のみ“専門性”に関わる。分業化について二つの界双方に共通するといいつつ、専門性には後者のみを充てる。その点、専門性が双方に関わるとした、先にみた十二節と矛盾する。分業化は本来“組織的協同性”[34](p.20)を前提とするが、この協同性の崩れているのが縄張り意識や抜け駆け根性、見てくれ根性の支配する学界であると考えられる。

中井は特に概説しないが、作業所内分業なら計画性がある。社会的分業なら個々の事業者が無方向でも全体として個々の作業は結合するし、結合できない事業は淘汰される。他方、学界の分業は研究室や個人単位のもので、全体の見通しや結合・連携を欠いているだけでは淘汰されない。

いわば産業界・学界双方分業化しているが、連携を欠くため、より分業の弊害が大きく現れるのが学界で、それゆえ専門性の語でその歪みの原因が抽出・表現されたといえる。

これらの節を受けて十五節では商品性と専門性が並列で記され、そこでの概念の問題状況は無批判性と無協同性とし、前者の処方に審議性、後者の処方に代表性を挙げる[34](p.18)。

このように十二節～十五節では商品の世界にも専門性に通じる要素があることを当初認めつつ、産業界・学界両者の共通部分を専門化ではなく分業化と表現し、商品性と専門性とを切り離す。前者を産業界、後者を学界が担うとする。担い手をこのように分け、商品性と専門性を、あるいはそれぞれの対策の審議性と代表性を、これら四つの節全体としては並列で捉える。

3.2 「委員会の論理」十六節の審議性と代表性の階梯性

以上矛盾を抱えつつ十二節から十五節にかけての全体を通してみると、商品性と専門性並びにそれぞれの対策である審議性と代表性は並列におかれ、商品性を産業界、専門性を学界が担うとされる。一方、それぞれの対策である審議性と代表性の担い手は十五節まででは、まだ明示されない。他方「委員会の論理」終節十六節では、審議性と代表性とがステージ、階梯で捉えられる。

ステージで把握される根拠を示すと十六節の第4段落で“この**提案**と**審議**、即**審議性**より、**委任**と**実行**、即**代表性**—（中略）—に転化する契機が即**計画**である”[34](p.22 [中略筆者])と、審議性から代表性に“転化する”と記されるからである。

十六節冒頭の段落に戻る。“先づ**審議性**は、一般に、現実地盤の反映としての**提案**が出发点と成る”[34](p.22)。様々な欠乏や疎外状況の下、大衆が“力としての表現を求める。この言語への現勢力としての表現が即この提案に外ならない”[34](p.22)。要するに大衆の欠乏や疎外状況—その典型は十五節までの議論の、“概念の一般性”からの疎外—を反映した表現が“提案”である。

ただしこの“提案”は、欠乏や疎外のうち大きいものを隠し、小さいものを針小棒大に表し得る。その意味で“認識的に云ふならば、反映の歪曲が可能”[34](p.22)で、歪曲は“基礎射影が欠落してゐるから”[34](p.22)生じるとされる。

ここで“基礎射影”の語が唐突に現れる。この概念が『世界文化』前身誌、『美・批評』掲載の「模写論的美学的関連」(1934)の主題で同人周知ゆえ、紙幅の関係[17]で説明が略されたのだろう。

この1934年の論文では射影を1直接射影（反射）、2上部射影（反映）、3基礎射影（模写）の三つに分ける[31](p.14)。1は“判断なき結論”“結論なき直接行為”[31](p.14)で、記憶表象まで浮かばない反射運動である。他方、認識し判断するのが2と3である。一応世界像を結ぶが因習や私

情等で歪められるのが2の上部射影である。“すべての射影は2の立場にある”[31](p.14)とされ、通常の認識はこの上部射影に留まる。対する3の基礎射影はここでは“認識の達しない深さにおいて、みずからの状況を正射影し、把持しているところの、一つの極限的可能態”[31](p.14)と、極限の目標とされ、上部射影の歪みを乗り越える。なおここで“正射影”の語がでてくるが、『美学入門』で正射影は基礎射影の別名とされる[29](p.112)[30](p.141)。

「委員会の論理」に戻る。提案は、様々な議論を通じて歪み、嘘言からの解放を経て基礎射影(正射影)をめざす。“この**提案**は多くの**質問と説明**と**討議**を経て**決議**にまで至る。この間に、提案は多くの現実情勢の認識の歪曲より是正され、嘘言と虚偽より濾過されて、正射影をアツプビルドするために努力せられるべきである”[34](p.22)。ここで“**決議**にまで至る”とあるように、“決議”がターニングポイントとなる。

提案→審議→決議までが“**審議性**”の領域、“決議”を得ると“**審議**より脱して”[34](p.22)“**委任と実行**”[34](p.22)の段階、要するに“**代表性**”の領域になる。

審議性の最終段階、決議を経ると設計図が作られる、他方代表性の最終段階、実行を経ると投影図が得られる。この設計図(計画)と投影図(報告)は本来同じである。しかし誤差がある。しかも“**誤差**こそが歴史進展のプロペラである”[34](p.23)。誤差の存在を認識し“誤差の現実的地盤への再検討による是正”[34](p.23)をめざし、軌道修正を図りつつ最初に戻りループする。新たな設計図をめざし、審議性の段階へと発展的に戻る。

ここで“正射影”(基礎射影)と3段落前の引用文4~5行目の傍点部分にあるが、それが“嘘言と虚偽”を“濾過”して得られる点[44]、さらに“誤差”—設計図からすると投影図との差は意図せざる嘘言になる—が歴史の原動力である点で、嘘言の媒介が「委員会の論理」の“本題”[42]、十六節でも貫かれる。ただし審議性の成果物である設計図や、代表性の産物である投影図がそれぞれ

何なのかは、未だはっきりしない。

なお通常、“誤差”はその語感から微少なことが期待される。よってここでは基本的に嘘言の克服のレベルで嘘言の媒介が示されているといえる。だが“歴史進展のプロペラ”との表現から誤差・嘘言の積極的役割への期待も否定できない。通常誤差やコミュニケーションの疎隔は克服の対象で、原則小さいほどよい。他方歴史進展の原動力となる誤差もあり、それは肯定的に解され得るとの趣旨であろう。この点は本稿4.で論じる。

4. 被投側と投企側のズレ、誤差、誤り

4.1 光の二方向性の議論

ここで少し「委員会の論理」から話題を転じ光の二方向性にふれたい。中井は光には能動・受動二方向あり、基本的にうつすこととうつされることは対等であるとする。

例えば「「見ること」の意味」(1937)では“「うつす」という言葉には大体、映す、移す、といったように、一つの場所にあるものを、ほかの場所に移動または射影して、しかも両者が等値的な関連をもっていることを指すのである”([29]p.305)と記される。あるいは「芸術の人間学的考察」(1931)でも“「見ること」はその本質の中に「うつすこと」をもっている。映す、移す、覆すなどにおけるがように「うつす」ということの内面には射影的等値的移動の意味が籠っている”([45]p.5)と書かれる。さらに能動(投企=entwerfen)の“映す”と受動(被投=geworfen)の“映す”([45]p.5)は方向に差があり、“おのおの異なる領域をもつ”([45]p.6)が、いずれも光を“うつす”点には変わりがないともされる。カメラのレンズが受動の方向に映す作用をし、そこで得られたフィルムを編集(モンタージュ)・加工したフィルムを映写機が能動的に映しだす。“映したフィルムと映すフィルムはこの光の二つの方向の交流の中に同一物なのである”[45](p.6〔()は中井〕)。

このように光には二方向あるが、それは基本的には“等值的”という意味で対等あるいは“同一物”であると中井は論じている点を、ここではまず押さえておきたい。このような同一性が「委員会の論理」でどのように発展させられているかを、次節 4.2 以降でみることにする。

4.2 光の二方向性の議論からみた、設計図と投影図

そこで、上山[42]が「委員会の論理」の“本題”とする最終十六節の設計図と投影図を、ここではこの光の二方向性の議論に照らして検討する。光の二方向性に準じて「委員会の論理」十六節を読むと、設計図とは嘘言や歪みを取り除いた形で現状をまず映しとり、それを基にビジョンを能動的に映しだすことである。他方、投影図はビジョンの実行の結果を受動的に映しとることと理解できる。ここで光の二方向性に準じたのは、「委員会の論理」の該当箇所それぞれドイツ語が記され、それらが光の二方向性の議論で使ったドイツ語に対応するからである。よって“設計図 Entwurf”[34](p.23) (<entwerfen=投企=映写機が編集作業で嘘言を濾過した基礎射影を経たビジョンを映しだす) vs “投影図 Geworfenes”[34](p.23) (<geworfen 被投=撮影機がビジョンの実行の結果を写しとる) [45](p.5-6)と、能動 vs 受動の連想が可能である。しかも“厳密に云ふならば、一つの建設に於ては、設計図と投影図は同一物である筈である。計画と報告は同一であるべきである”[34](p.23)。と、前節 4.1 節 2 パラグラフ目に引用した文章同様のことが指摘される。しかも“同一”であることが、ここでは繰り返して強調される。

先にみたところでは、設計図を作る段階で、嘘言からの“濾過”を経て正射影（基礎射影）を得るとされた（本稿 3.2 の後ろから 5 段落目の引用文）。この“濾過”はフィルムでいえば編集過程である。1932 年の「うつす」では次のようにいう。“この投げられる方向より投げる方向への転換性、そこにこそモンタージュの機構の秘密がある”[29](p.302 [傍点は中井])。光の二方向性の

系列の論文では受動と能動の光の同一性を強調すると先ほど本稿 4.1 節で述べたが、その系列にあると考えられる「うつす」では、その二つの方向の光の間に“モンタージュの機構の秘密”を介在させる。

この記述に即して「委員会の論理」十六節を捉え返すと、いわば得られた（“投げられ”た＝映しとられた）素材群から取捨選択を経て状況に関する歪みない認識を得た結果が、基礎射影を基にした提案で[46]、その提案をさらに議論で揉み、実行部門という近未来へと、（「うつす」の表現で）“投げる”方向に転化したのが、「委員会の論理」の“設計図”である。なおモンタージュは“映画の技術用語としては編集を意味する。・・・フィルムの断片を繋いで 1 編の映画に統合する操作をさす”[47]（〔・・・は筆者〕）。

他方投影図についてはここで部署に分かれる点に留意したい。“それが既に現勢的な標示として決議を得るや、それは審議より脱して、人間的才能と性格によつて、その部署に従つて、その組織の線を辿つて、言語的意味は再び、人間的活動の中に具体化される”[34](p.22)。

「委員会の論理」を支える原構造として中井の映画制作の体験があるという佐藤[2](p.59)や後藤（宏）[48](p.104)の指摘を踏まえ、ここで“部署に従つて”とあるので、中井に身近な集团的芸術である映画の、分業化した制作過程も想定し得る。

しかし上記の「委員会の論理」からの“部署に従つて”のフレーズを含む引用部分は以下のように続くが、そこでは“委任”や“実行”の言葉が現れる。“即意味の付託性は、現実の組織機能の中に受取られる。即ここに委任の意味があるのである。その受取られた付託性の具体化されることが実行である”([34]p.22)。

よって、“委任”“実行”の語があるので映画制作の現場よりは、まずは官僚組織を念頭におくのが自然である。ただし行政官僚に限らない。学者が行政機構にブレインとして参加することも想定できる。1933 年に非公式にできた昭和研究

会に、中井に強く影響を与えた三木清の義兄である東畑精一が参加、1936年正式発足し38年8月、三木自身そこに加わるが、その空気も意識されよう。というのも東畑の実弟速水敬二は京大哲学科における三木や中井の後輩で、しかも「委員会の論理」(下)のでた1936年3月、ヴィンデルバント『哲学概論』の邦訳を岩波文庫で出すからである[49][50]。また中井は戦後広島県知事選に立候補した際、施策のため調査する学者集団を自分は抱えている点を演説で強調したと佐藤はいう[2](p.132)。実際久野[14](p.462)は、中井が「委員会の論理」を“『五カ年計画』を支える『人^{ナロードナヤ}民^{コミニヤ}委員会の論理』”であると語った旨、証言する。行政府の論理である。

「委員会」とは何かについて一正確には“決議”後の「委員会」、いいかえると実行し、その結果として投影図を作る方の「委員会」とは何かについて一協同性のある官僚機構並びにブレインとしての学術組織と、当面の本稿の文脈では捉える。このように考えると、十五節までは商品性と専門性を並列で捉えていたのに、十六節では階梯で捉える理由もある程度、納得がいく。商品性は普段の人々の経済活動等、日常生活と密接なもので、商品の嘘言性に典型的に示されるその活動の歪みは、基礎射影を経た提案をさらに揉んで設計図を得る審議性—その担い手は主に議会であろう—の段階で質^{たが}され、認識上の回復がめざされる。

他方この審議性で得られた、歪みからの回復策である設計図に基づき、実際には官僚機構やそれを支える学術組織に、この歪みからの解放の実務は委ねられる。そこでは縄張り意識や抜け駆け根性、見てくれ根性を脱した、全体の連関をみすえた“協同性ある”姿、つまり代表性が求められる。

商品性の担い手が産業界だとすると、その処方である審議性の担い手は議会等になり、専門性の担い手が学界だとすると、その対策である代表性の主な担い手は官僚組織である。学界の一部はブレインとしてそこにも参与し、縄張り意識等に凝り固まっている他の同僚を指導する。

こう考えると階梯で捉える理由はより明確に分かる。だがまだ、なぜ十五節まで並列に捉えたかの理由は分らない。

しかしこの最終十六節は計画の実行で終わらない。それがこの疑問の答えを導く。

計画を実行したあと、実行したものの報告すなわち投影図が必要である。先述のように本来、設計図と投影図は同じであるが“誤差”が生じる。本来同一との認識は光の二方向性に由来する。他方本稿3.2の終わりで述べたが、歴史の原動力である“誤差”により、投影図が設計図に、いいかえると代表性が審議性に、差し戻される[51][52]。

つまり光の二方向性の議論で能動のうつすと受動のうつすは基本的には同一物であった。もちろん「基本的に」と述べたように差は意識されるが、大きく示されはしなかった。しかし今みた「委員会の論理」の十六節ではまったく同一というのではなく、そこに誤差があると明記され、誤差があるからこそ、差し戻しが生じる点で、誤差に大きな意味をもたせ得るといえる。

4.3 誤差を通じてループするモデル

このように設計図と投影図との誤差への気づきを契機に委任、実行の段階から再び審議性へと差し戻されるモデルを、十六節は想定する。

しかもその差し戻しは一回だけではない。繰り返される。というのも本稿2.1のコプラのくだりで説明したように、モデルは常に否定されるものであると中井はみなし、竹内のいう“論理の自己疎外”[15](p.215)を避けようとしたからである。よって以下の引用のように、螺旋状に無限にループするモデルを中井は想定する。

“かくて、**委員会の論理**は一つの回帰的でありながら無限進展の過程として、自らを図式化するのであるまいか” [34](p.24)。

しかも「委員会の論理」自体も仮説的であるとして以下のように記される。“この**委員会の論理**として、ここに表現した**この図式**も、それが**一つの提案**として呈出さるる事で、この図式は、決して、

思惟的図式として完結するのではなくして、実践そのものの中に、自ら位置づける事で、自己表現的な連続を、現実そのものの上に、持つてゐるのではあるまいか” [34](p.24).

もちろん上記の引用文からもこのループするモデル自体の否定もあり得るが、このモデルが成立する限り、一つのサイクルでは審議性（あるいは設計図）と代表性（あるいは投影図）は階梯で捉えられる。他方サイクルを無限に重ねるループ状のモデル全体でみると両者は並列の位置に置かれることになる。

以上から本稿 3. で指摘した矛盾は解消する。つまり審議性と代表性を全体として並列で捉える「委員会の論理」十五節までの記述と、審議性と代表性をステージ、階梯で捉える十六節冒頭の記述との矛盾も、誤差を通じて同一に近い二つの局面が相互に交代し、さらに螺旋状にこの交代がループするモデルが提示されていると考えることで、解消される。

4.4「設計図」段階の「委員会」と「投影図」段階の「委員会」との関係

以上、前節（4.3）で「設計図」と「投影図」が並列でありつつ、両者が階梯でもある理由を、ループ状のモデルに求めた。そこで本節では「設計図」を求める「審議性」の段階の「委員会」と、「投影図」を作る「代表性」段階の「委員会」とはどのような関係にあるかを考えたい。

ここでまずこの「委員会の論理」での「委員会」は「決議」の前、すなわち「設計図」を得るための「委員会」である議会と「決議」後の「委員会」、すなわち実行をし「投影図」を作るための「委員会」である官僚組織とブレイン、双方であるとの今までの議論を確認しておく。しかし中井が力点を置くのは設計図の委任を受けた官僚組織とブレインであることは、先の久野[14](p.462)の証言並びに佐藤[2]の記す中井の選挙演説からいえることも改めて確かめておく。

1930年代後半に起こる有名な FF 論争（行政

責任に関する論争）からすると、この中井の姿勢は、行政が積極的な責任を果たすべきというカール・ヨアヒム・フリードリッヒの立場に近い。他方 1948 年から NDL 副館長の職責上、官僚を統制する国会の力を強める制度設計に中井は腐心する。その点で国会を支える組織に奉職する晩年の中井は FF 論争のハーマン・ファイナーの立場—官僚の行動に対する事後コントロールとアカウンタビリティの確保を求める考え方に近い。この FF 論争を総括して曾我謙悟は次のようにいう。“政治の側のコントロールをかける能力と、それ（行政の専門性や組織力を活かすこと）を支援する機構とセットで両者のバランスをとる必要がある” [53](p.106〔（ ）は筆者の補記〕）。

中井は 1936 年この「委員会の論理」では官僚機構ないしはブレインに、1948-1952 年、国立国会図書館での実務活動を通じては議会に、それぞれ重きをおく。ループ状のモデルゆえ両者相互のバランスはどの時期も中井の理念と実践で確保される。ただし国会議員への奉仕を第一義に考える NDL 奉職後も諫官が主君に身を挺して進言する『資治通鑑』を例に、戦後、図書館論の中で、NDL 職員が大臣や議員に場合によって職を賭して意見を具申することを（あるいはそうせずに済む、物事を集団で解決する時代への見通しを）、中井は想定する[33](p.115-116)。

その点で、少なくともこの時期の中井の関心の基本は前者、すなわち投影図を作る代表性並びにその担い手である官僚とブレイン集団にある。

本章をまとめる。「設計図 Entwurf」[34](p.23)は entwerfen 投企・能動に通じ，“投影図 Geworfenes” [34](p.24)は geworfen 被投・受動に通ずるし、上でみた能動（投企=entwerfen）の「映す」と受動（被投=geworfen）の「映す」[45](p.5)も併せると、誤差を通じての歴史進展のモデルを、（マスメディアの送り手のみならず、学問・行政・産業等の送り手も含めた）広い意味での送り手集団と受け手集団の双方向性のモデルにも読みかえ得る[54]。その点で、この時期中井が能勢克男、齋藤雷太郎と組んで刊行した隔週刊

新聞『土曜日』とも照合する。『土曜日』は、読者の投稿によってのみ構成される双方向の新聞を目指していた。

ここで誤差を形成する情報も設計図からみたら結果的に嘘になる、少なくとも嘘を含む。また設計図・投影図に記された時点でそれらの情報は言説で、嘘言の媒介の一環となる。なお基本的には誤差を減らす文脈での嘘言の克服、あるいは嘘言によるコミュニケーションの疎隔状況の克服が目指されるが、歴史進展の要因とも誤差をみなすので、より積極的な嘘言への期待も窺われる。

5. まとめと考察

5.1 まとめ

「委員会の論理」で基礎射影の説明はほぼ略されて分かりづらいが、“基礎射影”が「委員会の論理」の“本題”[42](p.249)、扇の要の位置におかれ、嘘言の媒介の議論は「委員会の論理」全体を貫く。コブラの議論も一カ所現れるのみであるが、佐藤[2]のいうように重要な意味をもち、嘘言の媒介に通じる。さらに設計図(計画)と投影図(報告)との誤差が歴史進展の原動力であることも、それらは言説であるので、嘘言の媒介である。

結局差を埋めて嘘言を減らすため、嘘言をひとまず重視するのが中井の流儀・方法といえよう。

次に本稿 1.2 で本稿の課題にするとした、嘘言が遍在するか否かという観点も交えて、本稿のここまでをふり返る。本稿 1. 5 でみた辻部の方法的指摘に基づき、「委員会の論理」で基礎射影や光の二方向性やコブラの不在の議論はめだたないが一定の役割を果たす点を明るみにし、同論文の難解な箇所を通りを、オリジナルテキストよりは幾許かよくした。嘘言との関係でいうと基礎射影は嘘言の濾過の点で関わりがあると論じた。また「委員会の論理」のコブラの記述を『美学入門』のコブラの不在の記載と重ね、コブラとライナッハの確信と主張の峻別の議論が併記される意味を明確にした。よってひとまず命題の是非の判断を他者に委ね、一切の命題を自分にとっての嘘言とする

ことになる。その点に基礎射影とコブラの不在が関係すると述べた。さらにその嘘言の問題と光の二方向性の議論と重ね、「委員会の論理」の“本題”[42]、十六節のループ状モデルが嘘言の媒介と関連する点及びその理由を明確化した。

以上、本稿 1.で課題とした、「委員会の論理」全体が嘘言の媒介で貫かれるか否かは、貫かれ嘘言が遍在するとの分析結果を本稿は示した。そのことから、「委員会の論理」は本稿 1.で記した自己否定的なミッテルの媒介の窮極の姿を表す論文であるといえる。

以上が本稿 2.から本稿 4.の分析の結論である。

5.2 考察 1—中井のおかれた時代状況における嘘言の媒介の意味

次に、中井の時代状況における嘘言の媒介の意味、メディア論における意味を、二節に分け順次考察し、最後の節は以上二つの節の考察を踏まえた結論と今後の課題を述べる。まず本 5.2 節は中井の時代状況に照らした意味を探る。

「委員会の論理」が 1936 年 1~3 月号という 2.26 事件前夜に書かれた意味を考えたい。本稿 2.1 前半で確認したソクラテスやブルーノに「委員会の論理」七節は言及したが、他の者は嘘言を通じてしか主張できないのは、言論抑圧の状況下、確信した真実を、妥協や媚びや晦渋な表現を含みつつ主張せざるを得ない状況の反映である。抑圧は政府のみならず民間によるものもある。その典型が、慶應義塾大学予科教授や国士館専門学校教授を歴任した蓑田胸喜によるものである。蓑田が文部省や政治家に働きかけ瀧川事件が起き、同事件の学問の自由の侵害に抗する意味で中井らの集った雑誌が、「委員会の論理」掲載媒体『世界文化』の前身誌、『美・批評』(第二次)[55]で、その後継誌『世界文化』はその抵抗戦線の色彩を濃くしている。

七節での出版や投票や就職試験での嘘言への言及はそうせざるを得ない状況の反映である。七節で“何れの言か嘘言ならざる”といいつつ、八節で、すべての主張は嘘言でなされるという七節の

発言を忘れ、確信より主張をよいとする、矛盾した流れは、媚びる、単純化する、難解にいうといった嘘言を通じてでも、あるいは逆に直球を投げるのならブルーノや諫官になってでも、“主張”はせねばならぬという中井の強い思いの反映である。

本稿 1. でみた、紙幅の都合で削除を要求された際、コブラの不在や基礎射影という肝腎要の論の説明を端折ったとここまで分析してきたが、それらの省略のもう一つの理由として検閲対策もあったであろう。「委員会の論理」の文体を学術的で難解だとする上山も、“中井はおそらくあの状況においては、ああした表現しかとりえなかった”[42](p.250)と評す。また大窪は「委員会の論理」が社会運動の問題意識をもちつつ新カント派の用語を頻用する理由は、“(思想統制が進んでいた中において) 設定されたテーマを直截的に叙述することができなかったという事情があった”[9] ([括弧は筆者補記]) からであるとする[56]。

実際「委員会の論理」は辻部[16](p.453)や上山、大窪のいう通り晦渋の極みなのに、戦後すぐの尾道等での文化運動では中井の母以外聴衆の来なくなった“聴衆0の講演会”[33](p.189)のある種挫折の体験を踏まえ、農村の若い聴衆に受け入れられる単純化の方法を中井は編みだした。そこでの経験が戦後の『美学入門』の平明な語り口へと、中井の文体が変貌する契機ともなった[24](p.185-186) [57][58][59][60]。戦前の難解化と戦後の平易化。方向は真逆であるが、各々の時代状況に応じ、双方共に本当にいいたいことの本質を貫く嘘言である。その点で文体に籠められた両者の精神は共通する。

5.3 考察 2—中井の嘘言の媒介の現代メディア状況に照らした意味

次に中井の嘘言の媒介の現代メディア状況に照らした意味を考察する。まずは中井に即した議論をし、次に現代に話を展開させる。

本稿ではコブラの不在の議論を、言語を通じて解釈する文脈で捉えたが、北田[7]はメディア“を

通して”ではなく、それら“において”[7](p.75)捉える文脈でそれを理解する。無声映画時代の映画受容状況をみてそれは正しい。他方、無声映画が遠い過去となった『美学入門』の1951年にむしろ、中井はコブラの不在の議論をより前面にだすし、1930年代トーキーがすでに隆盛していた点に鑑みても、中井が両側面で捉えた可能性はある。

また「委員会の論理」でのコブラの不在への言及では、言語を通じての解釈が強調される。北田[7]は中井の現代的意義を問う中、インターネット・コミュニティがディス・コミュニケーション状態になりつつある状況を踏まえ、意味によって担保される“共同性”の対概念としての異種混濁性を生き抜く“協働性”[7](p.68)への親和性を中井のコブラの不在の議論に認め、中井のミッテルを“《意味》への抗い”[7](p.64)と捉える。しかし少なくとも北田[7]が注以外でふれない「委員会の論理」に限ると、同論文は意味伝達の意図の多寡での棲み分けとは、逆方向へと向かう。

実際佐藤はこの時期の京都消費組合での活動を「委員会の論理」の原体験として強調する[2](p.11)。また荒瀬はその活動での異なる属性の人々との具体的な接触を通し、嘘をつかないとの中井父子の誓いがあるままでは守れなくなるにつれ、嘘言を軸に社会的コミュニケーションを考えることが中井の切実なテーマになったとする[19](p.149)。しかしこの場合は、荒瀬本人からは明言されないものの事実上荒瀬が示唆するように、本稿 1.5 で荒瀬の見解として纏めた「嘘言の克服」よりは、むしろコミュニケーションの疎隔状況の「嘘言による克服」の方が中井の切実なテーマになったと解すべきであろう。具体的には思想の主体化である。生煮えのイデオロギーでなく、人々の生活実感と自分たちの思想とを相互に媒介し本物の思想を獲得することである。中井にそれが可能になったのは消費組合の活動があったからであると荒瀬は分析する。

この経験が原体験にあるからには、北田のいう異種混濁の状況を生き抜くモチーフは強くあるが、そこで目指したのは異質な他者に自分を否定的に

ぶつけることであって、異種混淆の状況を意味の伝達を回避してのみ生きること、“《意味》への抗い”[7]をひたすら強調することではない。

もちろん言語以外の媒体の重要性こそ中井は意識する。しかし言語から映像、映像から音声、等々に映しとり、翻訳する“等值的射影”[29](p.300)―作者のみた現実をあるメディア（一つの芸術領域）におきかえる（うつす）こと・あるいはあるメディアの記号を別のメディアにおきかえる（うつす）こと―を、中井は光の二方向性の議論の延長上に想定した。その上で等值的に射影しきれない残余部分、埋め得ない“誤差”“嘘言”部分を意識する。その点で確かに“《意味》への抗い”[7]は強くあるが、しかし異なる芸術・メディア相互の映しあいを重視し、言語的媒介の可能性も常に開く。

そこで我々も現代で考える。

北田のミッテル理解を敷衍すれば、異種の者と交わるにせよ彼らと意味を通じての交わりは避け、意味を通じての交わりは、気に入った者、同じ嗜好の者、あるいは同じエスニックコミュニティの者とのみ求めるロジックを容認する。フィルターバブル同様、孤立した島宇宙乱立の状況を後押しする。

他方、本稿 5.1 のまとめを踏まえ「委員会の論理」の嘘言の媒介を、コプラの不在の議論と結びつけて捉えなおし、筆者なりに中井の見解を以下《 》に要約する。《自己の立場からすると（自分が納得する前の）他者の見解も、主張された自己の見解もすべて嘘言である。判断の権利を他者に委ね、自己の見解を嘘言とみなすことになる。しかしそのことで自己の見解へのこだわりを一切もたない形での双方向のコミュニケーションが目指され、窮極の寛容の形を示すことが可能となる。これがいわば捨て身の媒介、ミッテルの媒介の一つの姿である》。言語の比重の小さい芸術を含めた、非言語コミュニケーションは、解釈・評価・共鳴を受け手・鑑賞者に委ねるのが普通であるが、そこでの“《意味》への抗い”[7]同様のことを言語的コミュニケーションでも貫くこと、それこそ

が、嘘言の媒介としてのコプラの不在の趣旨といえる。その意味で嘘言の媒介は、他者に対して言語においても開かれる。

しかも現代はグーグルやアマゾンや SNS が利用者の好む商品・情報・人のみカスタマイズして提示し、社会全体がフィルターバブルの集合になりつつある。様々なサイトでフィルタリングが進み、似た者同士それぞれのサイトに集い、それぞれで集団極性化が起きる。例えば三野裕之は“情報フィルタリングは、市民が多様な言論に触れる機会を減殺する。ひいては対話を抑圧し、民主主義への脅威になり得る”[61](p.376)と指摘する。その状況で、中井のいう、自己の元の見解へのこだわりを大枠以外ではもたずに嘘言をいう、捨て身の媒介、ミッテルは、自らを外に開くメリットがある。

また現代は、島宇宙が相互に排他的なだけでなく、言論全体としてみても排外的な時代と考えたいが、その点には異論もあるし、言論全体には多様なメディアがあり、特定秘密保護法は成立したが、制度上の言論の自由は 1936 年当時よりはまだ格段にある。しかし個々のメディア、サイト、グループ（政党、企業、学会内のそれを含む）内部で、発言しにくい状況が増している[62][63]。

ならば嘘の中に真意を潜ませる、あるいはコプラ部分を外した形で当人にとっての真実を示す術も必要となる[64]。中井も蓑田胸喜ら民間ベースの言論弾圧を直に肌で感じたが、本稿 5.2 後半で記した、媚びる、単純化する、晦渋にいう、判断を示す部分（コプラ）の発言のみ保留する、等の嘘言を通じてでも、確信を主張すべしという中井の思いは、我々の直面する状況でこそ顧みられるべきである。例えば上野は“たくさんの歴史・体制において、多くの嘘言が生き残りの手段になってきたことを中井も指摘したが、彼自身がこの論文の翌年には逮捕され、ある種の屈折と転向を強いられることになったのは皮肉なことと言わざるをえない”[21](p.225)と述べるが、今の時代でもネットやリアル空間個々のグループ内での自分の確信の、“生き残りの手段”として嘘言は有効であ

る。あるいはコブラ部分の言明の留保は一定の生産性をもつ。

また設計図を描く「委員会」が議会、投影図を示す「委員会」が官僚機構とブレイン集団というのが久野[14](p.462)の延長上での本稿の当座の「委員会」解釈であるが、中村保彦は久野の発言を首肯しつつ現代の官僚・議会制度の空洞化故、コミュニケーションを支える言語や主体を「委員会」の意味にとりたいたいという[65](p.13)。本間も主体と捉える[51](p.6)。他方木下は中井が“集団主体の在り方を委員会と呼び変えている”と指摘する[38](p.5)。

実際、中井は戦後、NDL 副館長時代、“「実体概念としての図書館」から「機能概念としての図書館」へ”[33](p.279)というスローガンを盛んに唱え、「委員会の論理」でもカッシーラーの実体概念から機能概念へという考え方にふれていた。知りたい情報を得る機能さえあれば建物や蔵書等実体物がなくても図書館機能は果たせるというこのスローガンに準ずると、「委員会」概念に対応する実体物に拘る必然性も弱い。中村や本間のように個々の主体にまで解消すべきか否かは措いても、木下の“集団主体の在り方”を「委員会」の意味とすると、筆者の記す以下の《 》の状況も想定し得る。《ある集団が他の集団に遭遇した際、相手を理解すべくトコトン議論し、相手との接し方の設計図を得る。設計図に基づき相手の集団と一定期間つきあい、違うところがあれば“誤差”の加わった投影図が得られる。誤差のズレによって、二巡目は相手集団とより精緻に議論するモデルをイメージし、これらを三巡、四巡重ねループをなす》。

他方パーソナライゼーションが強まるとパリサーのいうには“エンドレス・ミーというループにはまってしまう”[10](p.28)。それに対して異質な他者と間近に接する現代社会で交流を続ける枠組みを、“誤差”を間に挟み設計図と投影図とが発展的にループする「委員会の論理」は示し、これはノット“エンドレス・ミー”[10](p.28)、外向きのループになる[66][67][68]。

なお、エスニックコミュニティ内部にも様々な格差があり、岩渕功一のいう“超多様”[69](p.12)な中、それぞれのエスニックコミュニティを集団として一枚岩で捉えることは慎みたい。よってエスニックコミュニティに限らず異種混雑な状況の異質な他者の集合を「集団」として実体視するのも慎み、中村や本間のいう、「委員会」を個々の主体レベルにまで還元することも視野に入れ、流動的、機能概念的に“集団主体”[38](p.5)を捉える可能性も残したい。例えばこの見方は、「委員会の論理」と同時期、読者の投稿により紙面を構成することを目指した隔週刊新聞、『土曜日』の編集の中心にいた中井の姿にも照応する。荒瀬はいう。

“運動のための組織体という考えは『土曜日』の刊行者の発想のそとにある。『土曜日』の紙面をつうじてのコミュニケーションによって、各個人が抵抗の主体となることがファシズムをとどめる最も有効な防壁だという考えがつらぬかれている”[19](p.139)。

このように組織を離れた主体—おそらくそこでも仮に組織が残存するならば、望ましい組織として想定されるのは異質な者相互の会合う京都消費組合であり、それをより非組織化した“抵抗の主体”が『土曜日』を読むために喫茶店に集う不特定多数の若人たちであろう—を、「委員会の論理」時代の中井の活動に対して、40年前荒瀬は認めていて、本間[51]や中村[65]の読みの先駆であるといえる。しかしそこまで集団を個人レベルにいったん解消しても本稿 1.2 でも記した自己の元の見解への拘りをもたない捨て身のミッテルの媒介を実践し、縄張り意識、“「見てくれ根性」「抜け駆け根性」”[33](p.155)から脱却すれば、実体としての集団は想定せずとも“集団主体”[38](p.5)の実現に一歩近づく[70]。

ある意味、北田のように異種混雑な状況を生き抜くから嘘言の媒介が必要となるし、荒瀬のように嘘言の克服や嘘言による疎隔状況の克服はなされるべきであるから、意味を介した言語的つながりも求める。しかし差は埋まりきらず“誤差”が生じ、それは言語的つながりを越えた“《意味》へ

の抗い”[7]部分で、それにより歴史は進展する。しかしその部分もまた、ループ状のモデルであるが故に、意味を介した嘘言の媒介の対象となる可能性は常に開かれる。

中井のミッテル概念に“《意味》への抗い”[7]の要素は、間違いなく強く存在する[71][72][73][74]。しかし自己否定的媒介としてのミッテルは一北田[7]が注以外で引かない「委員会の論理」を中心にみる限りでは一、たとえば言語、意味を通じてのみであっても何とか相手を理解しようとする。そこで理解から零れ落ちる“《意味》への抗い”部分こそがミッテルとしての嘘言といえ、ループ状のモデルの二局面に挟まる誤差も、いわばそのような“《意味》への抗い”部分である。ちなみに「委員会の論理」(中)(下)を分載した『世界文化』十四、十五号では「委員会の論理」の隣に、中井を支えた久野収の訳したマックス・ホルクハイマー「現代哲学に於ける合理主義論争」も載ったが、ホルクハイマーの創始した学派の事実上の後継者とも目されるユルゲン・ハーバーマス同様の、粘り強いコミュニケーションを「委員会の論理」は想定する。実際岩渕のいうにはエスニックメディア研究ではハーバーマスの公共圏を支える状況の変容をふまえつつ、何らかの意味での公共圏の現代への適応が模索される[69](p.11&15)。あるいはパリサーもフィルターバブルが橋渡し型社会関係資本を減らし、公の意識を育めなくすると指摘する[10](p.29)。

その点で異種混淆の時代である現代でこそ、言語に還元しようとする熟議コミュニケーションを放棄すべきではない[75][76]。それを放棄せず、なおかつ言語に還元不能で伝わりきらない残余部分＝“《意味》への抗い”[7]部分を誤差として意識し、コミュニケーションの疎隔状況を嘘言によって克服しつつ、“誤差”の“歴史進展のプロペラ”としての生産性も意識することを「委員会の論理」は要請する。

以上の点で、「委員会の論理」の枠組みはボーダーレスな状況を生き抜くことを求められる、この我々の時代でこそ、その意義と有効性が顧みられ

るべきであろう。

5.4 結論と今後の課題—中井の嘘言の媒介の空間論的意義の考察に向けて

すでに本稿 5.1 に「纏め」があるが、以上の 2 節にわたる考察も踏まえた結論をここにまず記す。

嘘言を認めつつそれを埋めながら発展していくモデルを構築することで、異質なものを徹底して受け入れる、粘り強い熟議コミュニケーションを中井は目指した。そこに先駆的意義がある。

特に「残余部分」，“《意味》への抗い”[7]部分に着目した熟議コミュニケーションである点は瞠目される。いいかえると完全な合意があるとは考えないコミュニケーションである。他方国民国家の枠組みが危うくなるから、公共圏が成立しづらいという見方は、異なったエスニックコミュニティを話し合える・合えないに二分しがちで、戸邊俊哉[77]のいうように、前者の話し合えるという立場に関しては、そこでは完全な合意が求められると考える意味での、理解可能か不能かの 1, 0 的発想を迫りがちである。他方そもそも“誤差”，残余部分はあっても当然という中井の嘘言の媒介の考え方は、すべてでも折衷でもなく、ほぼ到達不可能だが漸近線的に近づける窮極目標の意味でのみ、異質性のない世界を想定する[78]。ボーダーレス化の進む現代、この広い意味でのみの合意、漸近線的合意を求めることは、生産性がある[79]。

そして中井の基礎射影に通じる系列は、嘘言の媒介といいつつ基本的に嘘言を克服する、あるいはコミュニケーションの疎隔状況を嘘言で解消することに重心がある。他方ライナッハを受けた確信と主張の分離あるいはコプラの不在の系列は、むしろ嘘言を通じて大きな真理を貫くこと、真理を生き残らせることに力点がある。

「委員会の論理」の要となる十六節のループ状モデルも、“誤差”を減らしていく作業と通常理解でき、その限りで荒瀬[19]のいう、嘘言の克服、嘘言によって疎隔状況を埋めることに通じる。しかしループ状のモデルゆえ“誤差こそが歴史進展の

プロペラである”[34](p.23)と記され、克服の対象以上の肯定的意味を嘘言に籠めたとも解せる。

嘘言という観点からまとめる。「委員会の論理」は嘘言の媒介を語るが、あえてそこでの嘘言を分けて捉えてみる。すると、そこにはそれ自体が克服の対象となる嘘言、コミュニケーションの疎隔状況の改善・克服のための嘘言、また大きな真実を貫徹させるための嘘言、そしてさらに歴史の原動力となる新たな発展のための嘘言が存在している。掲載誌の紙幅の制限、言論統制等、もろもろの制約のある中、これらが表にはっきりと現れない^{うら}憾みもあるが、先行するあるいは後続する彼の論考に照らし合わせると、これら嘘言の問題が複合しつつ通底していることが分かる。それらのいずれも根底に“《意味》への抗い”部分があり、自己否定的なミッテルの媒介に通じていく。以上が本稿の結論である。

次に今後の課題である。

上野は「委員会の論理」の“嘘言”について、“この嘘言こそが次の段階、つまりは「新しい空間」を発見するのだ”[21](p.225)と述べる。その読みの方向を引き継ぎ、なおかつ三木清『パスカルにおける人間の研究』(1926)から中井の受けた影響の一つである《次元の相違》の考え方[80]がその“新しい空間”の考えの底流にあると論じ、さらにその次元の相違の遍在化（パスカルの場合には回心は稀にしか起こらず、よって違う次元への上向的移行も稀であるが、その回心のようなものが水平化、日常化すること）の問題に繋げたい。つまり上野[21]はディアスポラ（故郷から離散させられた人々）として中井を捉え、ディアスポラの中井が既存の因習や枠組みを越えた“空間”をみていった点を主題とするが、筆者は同時に、ディアスポラや宗教的回心による新しい次元、“新しい空間”だけではなく、日常の営みでも我々の芸術的空間への移動をその典型に、異なった空間への移動を中井は意識していたと考えたい。そこからさらに、「委員会の論理」や『美学入門』でのコプラの不在の言及箇所と、それら以外での類似した議論の箇所、例えば「芸術的空間」(1931)

等の該当箇所との比較に、論を繋げたい[81]。

最後にエピローグに代えて中井晩年のエッセー「一握の大理石の砂」(1950)にふれたい。

彫像を彫り終えたミケランジェロの工房に、依頼主が下見に来た。依頼主は鼻が少し高すぎると彫刻家に注文をつける。ミケランジェロは彫刻の顔のところまで足場を昇り、槌で鼻を削るふりして、手に隠しもっていた大理石の砂を少しずつ下に落とした。“依頼主は「ああ、具合よくなった」といって、得々として帰っていったという”[29](p.319)。

このエピソードはありがちな話で史実ではなさそうだと断りつつ、そこに中井は同時代の愚劣な鑑賞者の眼よりも後世の鑑賞者の眼への彫刻家の期待という、確かな真実の存在を読みとる。

“多分さまざまな芸術家につきまとう一つのつくり話であろう。

しかし、この話の中には、ある切実なものがふくまれている”[29](p.319)。

ここでいう“ある切実なもの”とは何か。同時代人の愚劣さの中にあっても後世の人々の鑑賞眼に期待して美を守ることである。

“その鼻の美しさを守り、人類が、その美しい鼻を、ほんとうに自分のものだと思う日を待たなければならない”[29](p.320)。

ミケランジェロの守ったこの“鼻の美しさ”，それこそ嘘言によって人類に残された、大きな真実であろう。

注及び参考文献

- [1]門部昌志. 中井正一の言語活動論をいかに読むか. 研究紀要（長崎県立大学）. 2008, vol.9, p.115-128.
- [2]佐藤晋一. 中井正一・「図書館」の論理学. 増補版, 近代文藝社, 1996, 322p.
- [3]後藤宏行. 生産の論理と存在の論理. 名古屋学院大学論集. 1965, vol.4, p.271-291.
- [4]針生一郎, 松岡正剛. 中井正一をめぐって. 美術手帖. 1982, no.493, p.132-143.

[5]「委員会の論理」は一から十六までの部分に分かれている。これらを節と称する研究者と、章と称する研究者がいる。しかし中井自身が複数の節の冒頭で（八，九，十四），「前節」という言葉を用いるので「節」が中井の意に忠実である。また全集や岩波文庫は 8,9,14 のようにアラビア数字で表記するが『世界文化』では漢数字で表記しているので、本稿はそれに準じる。

[6]稲葉三千男. 中井正一の"媒介"論紹介. 新聞学評論. 1969, no.18, p.111-118.

[7]北田暁大. 《意味》への抗い：中井正一の映画=メディア論をめぐる。マス・コミュニケーション研究. 2000, no.56, p.64-77.

[8]後藤嘉宏. 中井正一におけるメディウム，ミッテル概念の関係性を再考するために. 図書館情報メディア研究. 2016, vol.14, no.1, p.61-79.

[9]大窪一志. “媒介 Mittel と媒体 Medium”. 単 独 者 通 信 脱 近 代 を 生 きる . <http://neuemittelalter.blog.fc2.com/blog-entry-106.html>, (参照 2017-05-11).

[10]Eli Pariser. 閉じこもるインターネット：グーグル・パーソナライズ・民主主義. 井口耕二訳. 早川書房, 2012, 344p.

[11]中村雄二郎. 共通感覚論：知の組みかえのために. 岩波書店, 1979, 364p.

[12]後藤嘉宏. 中井正一と共通感覚. 図書館情報メディア研究. 2008, vol.6, no.2, p.15-36.

[13]中村[11] (p.304) は三木清，戸坂潤，三枝博音並びに中井の名を挙げ，1930 年代に彼らが着目した共通感覚論を再読することは西田幾多郎の場所の論理の批判的乗り越えに通じると述べる。実際中井は西田哲学への批判的乗り越えを目指していた。後藤[12]はその指摘を受け中井と共通感覚論の関係を論じるが，西田哲学の乗り越えに本文ではふれないし，中村のその後の西田についての著書でも中井と場所の論理の関係は扱っていない。

[14]久野収. “解題”. 哲学と美学の接点. 美術出版社, 1981, p.460-471, (中井正一全集, 第 1 巻) .

[15]竹内成明. 闊達な愚者：相互性のなかの主体, れんが書房, 1980, 267p.

[16]辻部政太郎. “解説”. 哲学と美学の接点. 美術出版社, 1981, p.451-459, (中井正一全集, 第 1 巻) .

[17]編集後記. 世界文化. 1936, no.14, p.64.

[18]門部昌志. 中井正一における言語論への移行の問題(1)中間者をめぐって. 研究紀要(長崎県立大学). 2014, no.15, p.69-84.

[19]荒瀬豊. “読者の弁証法：『土曜日』における実験と実践”. 抵抗と持続. 鶴見俊輔, 山本明編. 世界思想社, 1979, p.136-152.

[20]本間伸一郎. 『委員会の論理』：場面と変化・それを視る心の置き場について. 活字以前. 2015, no.54, p.6-16.

[21]上野俊哉. 離脱者, 脱党者, 漂流者：ディアスポラのなかの中井正一. 思想. 1997, no.882, p.205-241.

[22]中井正一. 委員会の論理 (中). 世界文化. 1936, no.14, p.16-33.

[23]ここのテキストでは質の拡充が確信，量の拡大が主張と単純にいうが，「委員会の論理」全体を，嘘言の媒介の観点で読み解くと，量の拡大が質の深まりに転化するという，マルクス同様の見通しの存在が想定される。つまり質よりも量といいつつ，最後はその量がまた質に転化し得る。このことは本稿注[44]終盤に述べる「暫定的な基礎射影」の議論と併せることでより明確になるが，その詳細は別稿に委ねたい。

[24]木下長宏. 中井正一：新しい「美学」の試み. リポート, 1995, 263p.

[25]初出は 1951 年，河出市民文庫。その後『美学入門』1975 年，朝日選書で他の論文と共に再録，さらに『中井正一全集第 3 巻』1964 年，美術出版社に再録，『中井正一評論集』1995 年，岩波文庫にも再録。一番新しいものとして『美学入門』2010 年，中公文庫がある。なお朝日選書，全集，岩波文庫は河出市民文庫の初出のテキストを単に新字体・新仮名遣いに改める以外にも表記等に編集の手が入っている。他方，筆

者が「解説」を担当した中公文庫版は新字体・新仮名遣いに改めているが、それら以外は初出のテキストの忠実な再現である。木下長宏[24] (p.247) は全集のテキスト及びそれに依拠した岩波文庫を、中井の文章の息遣いを伝えていないと批判するが、中公文庫版はその批判に応じている。本稿で「委員会の論理」からの引用テキストを初出の『世界文化』に求めたのも、この木下[24]の批判を意識したからである。

[26]林達夫ほか．“コプラ”．哲学事典．林達夫ほか編．平凡社，1954，p. 338.

[27] 鶴見俊輔．哲学の論理．思想 1950，no.313，p.31-45.

[28]なおこの本文の記述に続けて、林ほか[26]は次のように続ける。“ド・モーガンは判断において種々の概念間の関係を表現するふつうの動詞を繫詞と考え、従来の観念を一般化した。すなわち“かれは犬にパンを与える”の“与える”はこの場合、繫詞と解される”[26](p.338).

ここででてきた主辞・賓辞とは形式論理学の用語であるが、通常の日本語でいう主語と述語のことで、主語と述語との関係を言いあらわす言葉が繋ぐ言葉としての繫詞（繫辞）である。上記の引用文のド・モーガンの説明のような“一般化”はひとまず置いて、上記事典からの引用部分にあるように通常、繫詞は“である”で表現される。なお鶴見俊輔は20代のときの論文「哲学の言語」(1950)で、コプラを“即”という言葉で説明する西田幾多郎を批判する。“西田哲学わ、論理中心の哲学であるとも言われているが、この哲学の主軸となるコプラ（つなぎ言葉）わ、現代における諸種の論理中心の哲学思想におけるよおな、明らかな規則にしたがって用いられていない”[27] (p. 38)。このように西田のコプラが曖昧であるとし、西田のテキストで“即”というコプラが多用されているという。

“「即」というのわ、複雑あいまいなコプラである。それわ、五種類以上のコプラのいずれかであり得るという意味であいまいである”[27] (p.38) と指摘し、西田の「コプラ＝即」に次の

の意味があるとする。“「即」にわ、次のよおな意味がある。“である”、“でない”とゆうことわ不可能だ”、“ちがうけれども、重要な面において同じだ”、“ヒュ的にそおである”、“もし・・・なれば・・・である”[27] (p.45).

この鶴見の理解は通常のコプラの、“である・でない”の範囲を少し越えて主語と述語の関係を表すものをコプラとしている。しかしド・モーガンほどにコプラ概念を拡張しない。なお、コプラの議論と西田哲学批判を関連づけることを鶴見はここで試みているが、本稿注[13]でも言及したように中井が鶴見よりも先に、一直接的にではなく遠回しに—それを試みており、その点は改めて別途論じるが、本稿注[68]も参照されたい。なお鶴見のこの論文は直接西田批判を目的としたものではなく、日本哲学全般への批判の一環でその代表格の西田にも批判が及んでいるに過ぎない。しかしこの鶴見論文と同じ号(313)の『思想』の巻頭論文は田邊元の元副手竹内良知による「西田哲学批判」であり、この号の特色を知った上での鶴見の西田への言及であった可能性はある。

[29]中井正一．現代芸術の空間．美術出版社，1964，354p.，（中井正一全集，第3巻）．

[30]中井正一．美学入門．中央公論新社，2010，180p.

[31]中井正一．哲学と美学の接点．美術出版社，1981，471p.，（中井正一全集，第1巻）．

[32]もちろん中井自身八節の冒頭で“我々は前節に於て、**確信**と**主張**の二つのものが異なる二つのものであることを見定めた”[22](p.21.)と述べ、さらにその節の次の第2パラグラフでは“**今や、この二つのものが一つのものの二つの表はれである**ことを検討すべきである”[22](p.21)と記す。中井自身が七節、八節にあえて間隙、裂け目を作る。したがって中井の立場からすると、矛盾はない、あるいは矛盾は意図的とも評せる。また中井は否定判断の機構への言及がこの矛盾に介在する旨、次のように加える。“この検出で先づ向けらるべき考察は**否定判断**の機構であ

る”[22](p.21). しかしながら佐藤[2]の示唆に基づきつつ、否定判断の議論の箇所ですりかえがふれるコブラの議論を『美学入門』のコブラの不在の議論へと接合させることで、この矛盾を中井自身の晦渋な表現よりも明確化した点に、本稿 2.1 の独自性がある。そうすることで“ここで問題とされなければならないのは、《嘘言の構造》から《否定判断の機構》への転換のモメントで、あきらかな論理次元のすりかえがおこなわれていることである”[3](p.280)という筆者の亡父後藤宏行による、中井への批判に対する、批判的乗り越え（再反論）も可能となったと考えたい。

[33]中井正一. 文化と集団の論理. 美術出版社, 1981, 375p., (中井正一全集, 第4巻).

[34]中井正一. 委員会の論理(下). 世界文化. 1936, no.15, p.12-25.

[35]田中熙. “九鬼先生への追想”. 九鬼周造全集月報2(九鬼周造全集11巻付録). 岩波書店, 1980, p.1-3.

[36]九鬼周造. 人間と実存. 岩波書店(文庫), 2016, 406p.

[37]中井の恩師深田康算の没後まもなくして京大哲学科に赴任した九鬼周造は、深田の講座の後任ではないが、美学・美術史で著名な岡倉覚三(天心)と幼少の頃より身近に接してきた人物であるだけに、美学に造詣が深く、中井も九鬼に傾倒していた。例えば中井と京大哲学科同期の田中熙は次のように記す。“同君(中井正一)はその天性たる闊達暢明さによってどの先生からも愛され、その秀れた直観力によって誰よりも早く、九鬼先生の非凡なる御学殖を見抜いた。そして周囲の吾々に対して先生の講義に列すべく推称して止まなかったのである”[35](p.1). なお九鬼の著書『人間と実存』でも「である」と「がある」が対比される。“「三角形とは三つの線で囲まれた面の一部である」という場合の「ある」は^レ可能的存在を表している。「鉛筆で描いた三角形がある」という場合の「ある」は^レ現実的存在を表している”[36](p.67). 九鬼の著

書は1939年のものであるが、おそらく本稿本注のついた1段落前の引用部分の着想には九鬼と中井との相互の影響が窺われる。

[38]木下長宏. 報告(概要). 思想の科学会報. 2011, no.172, p.3-10.

[39]門部昌志. 中井正一へのアプローチ. 思想の科学会報. 2011, no.172, p.29-35.

[40]本間伸一郎. 『委員会の論理』:「概念」の固定化と流動性にかんして. 活字以前. 2014, no.53, p.8-18.

[41]本間[40](p.9-10)は木下[38]が各巻の断層を、書いているうちのズレのように捉えるのをむしろ批判し、各巻で方向性がそもそも違うという。その点、本間[20]とはやや距離があり、ここでは本稿は本間[20]の方に依拠する。なお本稿注[80]でふれる中井における《次元の相違》の議論の理解に本間[40]は有益である。

[42]上山春平. 日本の思想. 岩波書店, 1998, 335p.

[43]「委員会の論理」全体の構造についての理解は上山[42]と筆者は近いが、毛沢東『実践論』『矛盾論』との類似性を指摘する上山の解釈には当面賛同しない。なお上山は最終節を15節と記述し、それを何度も論文中でくり返すが、これは16節の誤りである(この上山の記載ミスについては本間伸一郎氏のご教示による)。

[44]ここで「それ(“正射影”(基礎射影))」が「得られる」と本稿で記したが、本稿本文の本注がついた段落の3段落前の引用文の“基礎射影をアップビルドする”を、“正射影”を得る」と筆者は解釈した。しかしアップビルドは「模写」であるので、普通に考えればここは「正射影を得る」ではなく「正射影(基礎射影)を模写する」と解すべきである。しかし本稿本文の、本注がついた段落の4段落前に引いた「模写論の美学的関連——一つの草稿」(1934)のテキストにおいて射影を三つに分類して挙げる箇所で“1直接射影(反射)2上部射影(反映)3基礎射影(模写)”[31](p.14)と記され、また同論文の別の箇所で“基礎射影(模写機構)”[31](p.15)と

も記される。要するに基礎射影＝模写なので「基礎射影（正射影）を模写する」＝「基礎射影を基礎射影する」となり、その限りで「基礎射影を得る」と解さざるを得ない。「AをA'する」という中井の用語法自体に、やや粗さがあるが、仮にこの筆者の理解で進めていくと今度は、すでに基礎射影を得ているのなら本稿本文で主張しているループ状のモデルが成立しなくなるという反論が成立し得る。よってここに矛盾というか解釈上の行き詰まり、問題が生じる。そこで以下に引く「委員会の論理」十六節の最初のパラグラフの最後の文章を、この問題解決の手がかりとしたい。「提案とは、その限りに於て、現象の正確なる正射影即模写を前提としなければならない」[34] (p.22) とある。提案が審議され、審議されると設計図となり、次に設計図が実行され、投影図を結果として得、投影図と設計図との間に誤差が生じ、また提案に戻る。このように提案はループ状のモデルの“出発点と成る”[34](p.22)。出発点であるのに窮極目標である基礎射影を前提としている点にある意味矛盾がある。したがって“提案とは、その限りに於て、現象の正確なる正射影即模写を前提としなければならない”という今みた文章の、“その限りに於て”というフレーズに重みをもたせた解釈をここで提案したい。要するに、これは出発点である提案にすぎないという条件の下での基礎射影・正射影であるという意味である。このように仮説的なあるいは「暫定的な基礎射影」を前提とする意味にここを解すれば、先ほど指摘した解釈上の行き詰まりも解消する。なおこのことは、提案の段階での基礎射影が個人あるいは少人数のものであるのに対して、設計図、投影図とプロセスが進むにつれて集団レベルあるいはより多人数のものへと変わっていくと解すれば、個人の中では個人レベルという限りで窮極の基礎射影である。そしてそれが多人数化、集団化するという視点からすると、当初の個人レベルの基礎射影は、複数化した新たなレベルから眺めるとあくまでも「暫定的な基礎射影」

となる、と理解できる。窮極でありつつ暫定でもある。このように考えると、矛盾は解消する。しかもこのような着想は、「委員会の論理」七節の確信と主張の峻別の議論にも通じる。この点は改めて別稿で詳述したい。

[45]中井正一．転換期の美学的課題．美術出版社, 1965, 389p., (中井正一全集, 第2巻)．

[46]中井の基礎射影, 正射影は“濾過”を経た窮極の目標のように「模写論的美学的関連」では記され、『美学入門』ではスタニスラフスキーの演劇理論に依拠しつつ、俳優の“訓練の涯”

([29]p.114) ([30]p.143) とされる。他方この十六節では“提案”の前提が“基礎射影”で、その“提案”を改めて審議して“設計図”が得られるとしていて、“基礎射影”を窮極目標とみなす他の論攷とやや矛盾する。その点でもくり返しになるが、本稿注[44]で述べたようにここでの提案の前提とされる“基礎射影”は「暫定的な基礎射影」と解するべきである。なお本注をつけた本稿本文において、「うつす」と「委員会の論理」では投企と被投の順序がじつは逆になっているが、逆であっても齟齬は生じない。というのも本稿 4.3 で論じるように設計図と投影図とがループするモデルに「委員会の論理」はなっているからである。

[47]飯島正．“モンタージュ”．下中邦彦．世界大百科事典 30.平凡社,1972,346

[48]後藤宏行．大衆社会論序説．思想の科学社, 1966, 168p.

[49]東畑精一．東畑精一：わが師・わが友・わが学問．柏書房．1984, 236p.

[50]東畑と速水の妹喜美子が三木の妻となった。速水は、岩波茂雄の娘婿ながら岩波書店を一時飛び出した小林勇が三木の資金援助等で設立した鉄塔書院から、1929年ヘーゲルの翻訳書も出している。ただし東畑は妹の縁談を用意したのが由良哲次と岩波茂雄である旨、証言しているので[49](p.185)、三木の後輩の妹というのは偶然なのかも知れない。由良は三木とほぼ同時期の京大哲学科出身で、岩波は三木とも（岩波の

資金援助で三木は独仏に留学した)東畑とも(東洋大哲学科に東畑宅から通った喜美子が東畑の渡欧後も勉学を継続するため、岩波宅に一年間世話になった)縁が深いので、三木が喜美子の縁談の相手の名前にあがったのであろう。

[51]本間伸一郎. 考察『委員会の論理』Ⅰ：委員会の論理の全体像と、主体という概念について. 活字以前. 2015, no.55, p.4-19.

[52]本間[51]にもこのような「差し戻し」についての言及はある。“報告されたもの(＝行為の結果)は、「現実」の中での是非(客体的条件)が審議され、計画と報告の誤差が、主体が修正すべき課題(主体化)の素材として現れてくる。そして批判は現実的地盤の中で、誤差を是正しようとして再検討され、計画の修正を行うための動力となる。つまり、客体の条件が、主体の変更への根拠となるため批判は客体の主体的条件化といわれるのである”[51]([]は本間)。本間の議論を受けつつ本稿の独自性はこれに光の二方向性の議論を組み合わせ、投企(能動)被投(受動)の二面から無限に批判的にループする理由を明確にし、さらに誤差を嘘言の媒介の中に位置づけた点にある。

[53]曾我謙悟. 行政学. 有斐閣, 2013, 456p.

[54]通常の送り手側に属するものが、ここでは概ね受動の側、通常の受け手側が能動の側にいる、という逆転があり、逆にそのことが全体として広い意味での双方向性に通じる。

[55]『美・批評』は1930年から一時中断の上、1935年まで続くが、一時中断前を第一次、一時中断後を第二次と通常、称する。そもそも中井の大学院在籍中に中井の指導教授であった京大哲学科美学・美術史専攻の深田康算が亡くなり、中井が事実上中心となって『深田康算全集』(1930, 岩波書店)が編纂された。その編集のメンバーが『深田康算全集』刊行後も集まって作った同人誌が『美・批評』である。したがって『美・批評』(第一次)は美学・美術史を学ぶ者が同人のほとんどであった。他方1933年京大瀧川事件が起こり、京大の学生たちが抵抗

運動をし、文学部大学院自治会の中心メンバーだった中井も積極的に運動に加わり、そのため『美・批評』は刊行の中断を余儀なくされた。この際の抵抗運動のメンバーを加えて(一部美学系メンバーの同人からの離脱も経て)、同年『美・批評』は復刊したが、反ファシズムを前面に押し出し、雑誌の傾向が変わったので、これ以降の『美・批評』は『美・批評』(第二次)と称される。1935年に『美・批評』は『世界文化』と改称され、中井らおもだった同人が人民戦線に荷担した嫌疑にて治安維持法違反で逮捕される1937年11月まで刊行される。

[56]もちろん中井が新カント派にあえて擬装した訳ではない。もともと中井は新カント派に強く影響され、戦後マルクスも自由に読める時代になっても、文化運動で広島県の若者に教えたのはカントである。ただし『世界文化』刊行の時期は中井も自分もマルクスを勉強したと久野は証言しているし、その成果もある程度意識した論攷であるが、マルクスの用語等は使わず、彼の自家薬籠中の新カント派の用語ではぼ貫いているということであろう。

[57]山田宗睦. 昭和の精神史：京都学派の哲学. 人文書院, 1975, 286p.

[58]山代巴. 千代の青春. 経書房, 1996, 344p.

[59]羽仁五郎. 図書館の論理：羽仁五郎の発言. (山領健二編) 日外アソシエーツ, 1981, 270p.

[60]もちろんこの状況変化の背景は中井の初期からあった。その端緒は1922-25年の三木清の独仏留学にまで遡れる。三木はハイデルベルク大学の若き哲学徒たちがアカデミックフルに陥っているのをみてとり、帰国後、アリストテレスの『形而上学』の読書会を戸坂潤らと催した。そこで専門横断的な知の領域を切りひらこうとした[57](p.130-131)。さらに1928年羽仁五郎らと雑誌『新興科学の旗のもとに』を小林勇の編集の下で刊行し、各学会が専門分化しなおかつ学内や地域のグループとして閉ざされていた状況(三木に身近なその一例は京都哲学会)を打破しようとした[57](p.30,p.134)。瀧川事件

後『美・批評』を休刊し、抵抗運動に参加し、京大の全学的な抵抗運動が終息した後『美・批評』が抵抗運動の同志を交えて復刊した際、中井の脳裏に親しかった三木や戸坂のこういう試みが念頭にあったことは想像に難くない。というのも瀧川事件への京大の全学的抵抗という連帯の動きとその挫折の経験は、文教当局による研究者分断化策の成功ともいえ、ファシズムへの抵抗の基盤となるように学問を鍛え直すには専門馬鹿からの脱却が必要であることを中井らに強く意識させたはずであるからである。しかも『美・批評』とその後継誌『世界文化』は知識人同士の領域相互の横断の試みであるが、同時期中井のもう一つの実践である『土曜日』は、さらに別の局面にもその横断の試みを進展させようとしていた。この隔週刊新聞『土曜日』は知識人と労働者、学生という階層相互の横断と連帯を目指していた。具体的には読者の投稿のみから作られる新聞を目指して、新聞の編集後記や広告スペースでしばしばそのことを謳い文句に投稿を呼びかけていた。またそもそもこの新聞は『京都スタジオ通信』という松竹大部屋俳優の齋藤雷太郎の主宰した新聞の権利を買い取ったもので、小学校卒の齋藤と東大卒の同志社大元教授能勢克男弁護士と中井という3名（初期は林要同志社大学元教授も参加）が一緒に編集作業を行った新聞である。したがって『美・批評（第二次）』『世界文化』は執筆者に異なる領域の研究者への説明が求められたのに対して、『土曜日』は異なる学歴・職業の者への説明が求められる媒体であった。その点でそれら特に後者は、対等性のある媒介であるミッテルの窮極の姿を志向したと評せる。よってそこでの表現は自ずと平明さが要求される。しかし『世界文化』で求められる分かりやすさは庶民向けのそれではないし、一般向けの『土曜日』の方は検閲当局のチェックがより厳しくなることも想定もされる。例えば山代巴の伝記的小説に描かれる中井の母千代は、『土曜日』は小学校卒の人に読める新聞をめざしているというのに、

中井と能勢の交互に執筆する『土曜日』巻頭言が難解である点に不満を表明する[58](p.208)。

他方戦後は平明さへの志向と対等なミッテルの媒介の実践とが（GHQの検閲はあるものの右派的な立場からの）検閲への懸念はほぼなく直結し得る状況ではあったが、尾道での文化運動において当初は本稿本文で書いたように、聴衆が母千代以外いないという挫折を味わう。そこで聴衆を惹きつける方法を中井は自ら編みだした。なお、三木のハイデルベルク留学時代からの友人で三木と一緒に『新興科学の旗のもとに』を出した羽仁五郎は、戦後、参議院図書館委員会委員長として中井を尾道に訪ねていき中井のNDL館長就任を打診する（実際は衆議院の反対に会い、館長は金森徳次郎が任じられ、中井は副館長に就任した）。その理由として羽仁は、羽仁の今は亡き親友三木が中井を後輩として高く評価していて[59](p.142)、活字を通じてのみ「委員会の論理」を読んだ羽仁が強く感銘を受けたからであると、語る。“ぼくは（それまで）中井正一に個人的に会ったことはなかった。ぼくの親友三木清がかれのあとをうけてかれをこえて行くものは中井正一のほかにあるまいとぼくに語ったことがあり、ぼくは中井正一の論文“委員会の論理”を読んで近代合議制の理解の高さにおいてかれが比類なき思想家であることを知っていた”[59](p.171[()は筆者記])。

（羽仁はこのように証言するが、実際には1946年10月に三木清・戸坂潤追悼集会を新村猛と久野収、羽仁五郎、真下信一等が企画し、そこで“中井と羽仁氏がはじめて顔を合わせ、知り合う”[2](p.183)と新村が佐藤晋一によるインタビューにて証言している）。その点でも三木の脱専門馬鹿の問題関心の延長上に中井の諸活動がある。

[61]三野裕之。ソーシャル・メディアと民主主義。法学研究。2013, vol.86, no.7, p.365-390。

[62]稲増一憲，三浦麻子。自由なメディアの陥穽：有権者の選好に基づくもうひとつの選択的接触。社会心理学研究。2016, vol.31, no.3,

p.172-183.

[63]インターネットに、テレビ同様の偶発的副産物的学習推進機能（娯楽志向の人でもテレビをみつづければ一定時間、政治ニュースにふれ政治知識が増える等）があるかという仮説による稲増・三浦[62](p.179-180)の調査では、政治知識・国際知識の差を縮小するのがポータルサイト、新聞社サイト、2ちゃんねるまとめサイトであり、ニュースアプリとツイッターは差を拡大する方向に機能したという。よって実証研究でもツイッターの選択的接触による意に沿わない情報への忌避傾向は裏づけられた。実際SNSで「いいね」を押させる圧力をアプリのシステム設計者が作り、異論を媒介させない状況、あるいはLINE等の既読無視を忌避する傾向に、世界的な全体主義復活の兆しを感じ、寒気を覚える者は筆者だけであるまい。

[64]議題設定機能仮説によればマスメディアは議題提示に大きな影響力を発揮するが議題の賛否への影響力はさほどでない。しかし政権選択、改憲、核保有、女系天皇をはじめ議題の提示の有無そのものが世論を左右する局面は多い。賛否の判断部分を示すのがコブラであるとすれば、ネット時代はそれぞれのサイトの政治趣向に適合しない見解の持ち主であっても、その人がコブラへの拘りをもたずに議題のみ（いわば判断部分・コブラ抜き）の命題）を示すことに専念すれば、そのサイトの主流と別の流れに潮向きを換える可能性も生じる。そして場合によってマスメディアにも対抗し得る。

[65]中村保彦. 中井正一「委員会の論理」とコミュニケーション史の構想. 同志社大学図書館学年報. 別冊, 同志社図書館情報学. 2010, no.21, p.1-20.

[66]藤田貞次 “深田先生との出会い 中井美学の周辺1”. 中井正一1 (『中井正一全集』第三巻付録). 美術出版社, 1964, p.14-19.

[67]後藤嘉宏. 中井正一「委員会の論理」の「印刷される論理」の二価的側面について. 出版研究. 2017, vol.47, p.1-22.

[68]京大哲学科美学・美術史専攻の深田研究室での中井の後輩藤田貞次は回想する. “中井さんは得意の「はがおいてあるテオリー」をしばしば披露した. 「私は私が私において私であるのであって、それ以外の何ものでもない」というのだった. これほど確実な論理はないが、惜しいことに発展のない、閉ざされた世界で、ひらけゆく世界ではないというのだ”[66](p.17[傍点藤田]). この「はがおいてあるテオリー」とは西田幾多郎の場所の論理を暗に指すが、要するに西田弁証法が自己の内に閉ざされることを中井は批判した. この自己内ループを外に開くことが中井の課題であった. “（中井の恩師深田康算から）「西田君の Wirbel はね・・・どうも」などと鋭い言葉をうかがっても、そのころは、（聞いていた中井には）その意味がハッキリわからなかった”[31](p.350-351[()は筆者, ...は中井])とも中井は「回顧十年」(1951)で記すが、この深田の西田への評言も Wirbel（渦流）への批判で、自己回帰的ループを斥けようとしたものである. 中井は「委員会の論理」において西田の批判的乗り越えを田邊元に即して目指したが、その点は佐藤[2]並びに後藤[67]を参照. おそらく「委員会の論理」のループ自体は西田の Wirbel と基本形は近く、それが実行という設計図と投影図の二局面の切断部分がある点、そして提案から設計図、設計図から投影図という形で、より少数者からより多数者への受け渡しで繰り返されている点で、西田を乗り越えようとしていると思われるが、今後考察を重ねたい。

[69]岩淵功一. 多文化社会のメディア：文化的シティズンシップの実践に向けて. マス・コミュニケーション研究. 2011, no.79, p.5-25.

[70]本稿1.で述べたようにSNSで島宇宙が相互に孤立してできるが、一方でネット社会にはLinuxのように集合知がみられる. 集合知は縄張り意識、見てくれ根性、抜け駆け根性を脱した“集団主体”[38]の現れの一つとなり得る。

[71]Alain.芸術論集.桑原武夫訳, 岩波書店, 1941, 602p.

[72]桑原武夫“九鬼先生の遊び”. 九鬼周造全集月報 10 (九鬼周造全集 9 巻付録). 岩波書店, 1981,p.1-5.

[73]多田道太郎.“中井正一『美と集団の論理』”. 日本の名著:近代の思想 改版. 桑原武夫編. 中央公論社, 2012,p.191-196.

[74]本間[20]も思考する際に言語や概念を使用することへの自らの疑問を出発点にし, 本稿もその着想を基本的に踏襲する. 要は概念は本来時間的空間的に限定的であるものであるのに, 実際はその限定条件を解除しながら使用される. そしてその本来の限定性を象徴するのが中井の注目する映画のカットであると本間はいう. その点で中井の発想の根底に通常の言語的概念の“《意味》”に対する“抗い”があるとみる点は本間も筆者も, 北田[7]と変わらない. またアラン『芸術論集』 ([71])は芸術諸ジャンル相互の翻訳不可能性を基本的に主張し, 芸術において主題よりも素材が優先されるべきである点を, 美しい大理石の塊を前にしたミケランジェロを例にして, 強調する. “ミケランジェロは彼の許に齎された大理石塊を凝視することによってしか彫像を着想し得なかつたといふ” [71](p.332). この立場は基本的に“《意味》への抗い”を導くし, 「委員会の論理」の5年後にこの本の邦訳を出す桑原武夫は中井の親友でもある. 九鬼の赴任直後, 自分は最初, 恩師落合太郎の命で九鬼を訪ねていったが, “これ以降よくお邪魔したが, その頃おたずねする若手は中井正一君と私くらいだったせいもあり, 可愛がって頂いたと思う”[72](p.3)と桑原は語っている. したがって中井が桑原を通じアラン美学を知り“《意味》への抗い”志向を強めた可能性もある. 一方で中井は“等値的射影” [29](p.300)も求め, 彼には揺れ幅があり, おそらくはその揺れ幅を縮小するための着想が, 誤差を通じて設計図(計画)と投影図(報告)とがループするモデルを典型とする, 嘘言

の媒介である. なお中公新書で最初に出された本は, この桑原が編者である『日本の名著:近代の思想』(1962)であるが, そこでとりあげる50の名著の一つは, 「委員会の論理」を含む中井の没後の論文集『美と集団の論理』(この項目の執筆は多田道太郎)(2012年改版ではpp.191-196) ([73])で, その一つ前が九鬼の『「いき」の構造』(梅原猛執筆)(2012年版でpp.185-190)である. なお多田も上山の「委員会の論理」を毛沢東に引きつけて読む読解を踏襲する. それどころか中井と毛, 共に“認識主体を個人のワクにとどめず, 集団的認識の論理を考えたのである” [73] (p.195-196) と毛との共通性を強調する.

[75]北田暁大.分野別研究動向(理論)ー領域の媒介ー.社会学評論.2007,vol.58(1),p.78-93.

[76]北田[75]は2001-2003年の理論社会学動向を著書から追うという課題のレビュー論文だが, 理論社会学は領域と領域とを媒介する研究でそれゆえ社会哲学的研究であるとする鈴木広の見解を首肯し, それを軸に北田は論を進める. そこで“重要なのは, 諸領域を媒介する理論言語を模索する指向である” [75](p.79)と北田自身の言葉を綴る. 明言されないが, これは『世界文化』の実践やそれに先行する三木清の活動に通じる, 熟議的コミュニケーションの実践といえよう. また熟議的コミュニケーションの代表格であるハーバーマスの「公共圏」やハーバーマスの公共圏の着想の核となったハンナ・アレントの「活動的生活」に着目する流れを, 肯定的に紹介する. “いずれにせよ, 公共圏を核としたハーバーマス思想への関心がますます高まりつつある” [75](p.85). 他方, その逆に, 他者を理解できなくてもその状態をそのままにして他者と共生することを模索しようとする数土直紀の主張にも, 共感を示す[75](p.88).

[77] 戸邊俊哉. 熟議民主主義の場としての図書館に関する考察. 姫路大学教育学部紀要.2016, vol.9, p.85-90.

[78]中井はこの点について“緊張”や“シュパンヌング”[31](p.411&p.418&p.432)と記し、パスカルの賭や本稿本文でも中井に即して言及したヴィンデルバントの否定判断に論及する。通常の弁証法は対立する甲乙相互が交わるのに対して、シュパンヌングは相互が無限に漸近線的に近づき交わりそうでも交わりはせず、またいずれかを選ぼうとしつつ選んでしまうこともせず、「あれかーこれか」もいずれか選ぶのではなく「あれかーこれか」のままの宙づり状態を維持する。なお大窪は制度変動時の制度選択も、この面、つまりシュパンヌングの語を大窪は挙げないもののシュパンヌングのようなものとして、両極に引き裂かれた側面で捉える。“いま危機における旧制度から新制度への移行を考えると、この移行を媒介するものは、旧制度と新制度との裂け目に位置せざるを得ず、そこに位置することによって、古いものの「継承」と、新しいものを受容するための古いものの「否定」との両極に引き裂かれる”[9]という。この制度と制度との媒介は「委員会の論理」の重要テーマでありつつ本稿は言及できていない。制度と制度との媒介の際、引き裂かれることも、誤差やシュパンヌングで捉えることで拓けてくる展望も別稿で論じてみたい。また宙づり状態をキルケゴールやパスカルであれば超えていくので、本注の本稿本文の中でも「ほぼ到達不可能だが」と記してある。本稿注[80][81]とも関係するが、この点では中井の信仰心と革命観の解明と合わせ、考察されることが待たれる。

[79]戸邊はアイデンティティはその存立に差異が必要でありつつ、“非同一的なものの排除という権力作用”[77](p.88)をなすという。合意にも窮極的に同じ傾向があるとしてフーコーなどの闘技民主主義者がハーバーマスに代表される熟議民主主義を批判したとする。しかし熟議民主主義はこのような批判をとりこんだ。とりこめた理由は“熟議民主主義における理想的発話

状況の合意は統整的理念のように、反事実的な仮象であるからこそ現実をその理念へと漸近線的に近づけていく道標とな”[77](p.89)ったからであるとする。このように目標でありつつ、漸近線的に近づくだけの“統整的理念”として中井の「合意」－非言語的表現を言語に置き換えたり、次元の違う人を理解したりする、残余部分のある「合意」－は位置づけられよう。中井の残余部分のある「合意」、すなわち嘘言としてのミッテルの媒介は、“純粋な合意があると考えているわけではなく、合意を目指しつつ差異の顕在化も見捨てないというパラドクスの存立を明確に示す”[77](p.89)という戸邊の発言にも通じる。

[80]《次元の相違》とは、パスカルが慈悲、精神、肉体の三つの秩序は、線と面と空間同様、次元が違いと述べたことを指す。カントの三批判の距離もそれに比せられるし、本間[40]は三巻に分載された「委員会の論理」相互の方向性の差をカントの三批判相互の距離に較べるが、それも次元の相違に通じていくと考えて別稿を展開したい。

[81]「芸術的空間」等は演劇 vs 小説という線引きで論を展開し、映画 vs 文学という括りでの線引きをする『美学入門』等より、空間の次元の相違の議論が明確に現れる。また「委員会の論理」にも類似するコブラのテキストとしては、ライナッハとコブラについて述べた「文学の構成」(1930)もあり[31](p.259-260)、それとの比較も必要となる。また本稿注[78]後半とも関連するが、大窪[9]のいう制度と制度の媒介は宗教的回心同様、次元の相違が大きいだけに稀にしか起こらない。よって水平的な空間軸と垂直的な時間軸、双方における次元の相違の共通項と違いについての緻密な考察が、中井理論の再構築には必要である。しかしこれらについては別稿に委ねる。

付記

本稿は 15 年前の拙稿「中井正一のコミュニケ

ーション論における嘘言と利潤機構』『図書館情報メディア研究』4(1),2003,pp.21-38 の 2 章「中井の「委員会の論理」における「嘘言」の媒介」とタイトルは似ており、言及された素材も中井自身のテキストも彼についての研究の数も多い訳ではないので、ある程度重複する。またその章の問題関心の発展的拡大の面もある。しかし中井のテキストへの 15 年間の筆者の理解の深化・拡散・迷いが本稿に反映している。また、旧稿は中井全般の嘘言の考究を目的で一つの章で「委員会の論理」にもふれるが、本稿は「委員会の論理」理解というより狭くて拡がりもある課題に的を絞ったもので、目的が違う。しかも旧稿の段階では正直に申し上げて筆者は、「委員会の論理」を今以上に中途半端にしか理解していなかった。

(2017 年 6 月 7 日 受付)

(2018 年 1 月 1 日 採録)

(2018 年 3 月 8 日 出版)